

W09-011-1

システムの機能表現に対する言語学的考察

早稲田大学WBS研究センターシステム創造思考法研究会会員
早稲田大学商学研究科

松藤 直
黒須 誠治

はじめに

「京急って、ドアを閉めますって言うんだよね」森田一義(タモリ倶楽部にて)

鉄道の駅での案内放送において、通常使われている表現は、「ドアが閉まります」というものである。森田一義の発言は、「ドアを閉めます」という、多くの鉄道会社では用いない表現を、京浜急行が用いているのが珍しい、というコンテキストの上でのものである。これらの表現の性格については、後に言及してみたいと思う。

さて、ワークデザインにおけるシステムの機能は文章によって記述される。そして、その文章は自然言語によって構成されている。そのため、システムの機能を記述する際のいくつかの問題は、言語的な問題と関係している可能性もある。

しかしながら、いかなる文章が機能の表現として成り立ちうるのか、どのような表現がよくみられるのか、それはなぜなのか、といった事柄は、これまであまり検討は行われてきていないように思われる。なぜならば、それらの問題は、日本語の母語話者にとって自然に判別することができるため、改めてそれがなぜなのか、ということを考える必要はないからであるはないだろうか。

今回は、こういった、改めてほとんど検討されることのないレベルから、しばしば議論となる問題まで、システムの機能表現にまつわるいくつかの問題について検討を行ってみたい。そして、それらの検討のために、言語学的な視点を導入することにする。

1. システム表現形式

過去のワークデザイン研究会において、システムの機能表現としてふたつの形式があり得ることが明らかになった。それは下記のような二つの形式である。

(1)

- a. 学生が勉強する
- b. 学生に勉強させる

これらふたつの表現形式は同じ学生の勉強に関わるものであり、近接した意味内容を表しているように見えるにも関わらず、ふたつの形式として存在している。それでは、これらの表現形式の違いとは一体何なのであろうか。この問題を考えるうえでは、基本的な文の構造から検討を行ってみたい。

1.1 日本語の述語表現について

(1)の a.b.ともに述語表現は、勉強する、および勉強させる、という“勉強”という名詞に、サ行変格活用動詞である“する”を加える形の動詞とした。この“する”という動詞は、ヲ格を伴った場合、他動詞である。

さて、機能表現となる述語表現にはいかなるものがあるであろうか。英語においては、基本的に文中に動詞が必要となる。下記のような文においても、英語の場合は動詞を必要とする。

(2)

- a. I am a student.
- b. 私は学生だ。

英語の場合は、(2)a.の文においても、be 動詞を必要とする。一方、(2)b.の日本語の文には動詞はない。この文の述語は、「学生」という名詞に、助動詞の「だ」が付加されている。

このように、英語では文の述語をつくるためには、動詞が必要であるが、日本語では名詞＋助動詞の形もありうる。他に、日本語の述語を作ることができる品詞には、形容詞、形容動詞がある。

(3)

- a. りんごは赤い
- b. 海がきれいだ

(3) a.の文の述語は「赤い」というものであり、これは形容詞である。一方、(3) b.の文の述語は「きれいだ」というものであり、これは形容動詞である。学校文法では形容詞と形容動詞という呼び方をしているが、このふたつの品詞の違いは、活用の仕方だけであって、それ以外に差はない。そのた

め近年の日本語教育においては、これらをひとつの形容詞という呼称で呼び、名詞修飾を行うときの活用語尾を使い、イ形容詞、ナ形容詞という名称で区別する。(赤いりんご、きれいな海)

このように、日本語の文において述語となるものには、名詞＋助動詞、形容詞、形容動詞があるが、これらの文が機能表現となりうるかどうかを判定してみることにする。

機能表現とは、目的を表すものであるため、判定する文に「～ために、どうするか」もしくは「～には、どうするか」という文を接続し、文として成り立つかどうかで判定することとする。この、「～ために、どうするか」「～には、どうするか」とは、「～ために」「～には」の部分が従属節となり、この従属節を目的とし、主節において「どうするか」という手段を問うている。

(4)

- a. ?私が学生なために、どうするか
- b. ?りんごが赤いために、どうするか
- c. ?海がきれいなために、どうするか

これらの表現はできる限り文になるように助詞や活用語尾を変化させているが、いずれも文として成り立っていない。これらを文として成り立たせるためには、それぞれ従属節の文に更に大きな変更を加えなければならない。

(5)

- a. 私が学生になるために、どうするか
- b. りんごが赤くなる(りんごを赤くする)ために、どうするか
- c. 海がきれいになる(海をきれいにする)ために、どうするか

これらの表現は文として意味が通じると言ってよいであろう。いずれも従属節に「なる」「する」という動詞を加えている。つまりもとの文に動詞を加えることによって、名詞文・形容詞文は機能表現となる。

このように、名詞述語文、形容詞述語文はそのままでは、機能の表現とはならない。これらの文はいずれも主格・主題の属性を述べているもので、動作等を述べるものではないからである。

さて、これまで見てきたように、述語が名詞＋助動詞である名詞文、イ形容詞やナ形容詞である形容詞文はシステムの機能を記述する機能表現とはならない。従って、機能表現となるのは動詞を述語に用いた動詞文のみである。動詞文の例は下記のようなものである。

(6)

- a. 子供が遊んでいる

- b. 犬が寝ている
- c. 今日はラーメンを食べた

これらの動詞文はそのままではシステムの機能表現とはならない。どのような場合にシステムの機能表現となるかは別に検討することとするとして、動詞文の主語関係をまず見てみる。

上記動詞文の、a.b.には、格助詞「が」で表される名詞が存在する。この格助詞「が」で表された名詞はそれぞれ、遊ぶ、寝る、を行っている主体である。また、c.では動作を行っている主体は明示されていないが、ラーメンを食べるという行為を行ったのは、多くの場合、話し手である。

日本語の会話文においては、一人称・二人称は、特に明示する必要のある場合を除き、通常省略されてしまう。従って、c.においても、ラーメンを食べる、という動作を行った主体は存在していることになる。

このように、動詞文においては、動作の主体が存在し、多くの場合、格助詞「が」によって表される。この場合には動作の主体は主語となる。しかし、取り立て助詞「は」で動作の主体を表す場合もありうる。

(7)

ぼくは、タンメンにするよ(仲間と一緒に中華料理店に行って、注文を行う場面にて)

この場合、注文する主体は、「ぼく」であるが、格助詞の「が」ではなく、取り立て助詞「は」が使われている。格助詞「が」が述語との論理関係を表し、動作の主体や対象を表すのに対して、取り立て助詞「は」は、話し手の気持ちを表し、主題もしくは対比を表し、格助詞「が」などの代わりをする。

このように、動詞文においても、格助詞「が」で明らかに主語が現れる場合もあれば、そうでない場合もありうる。しかしながら、動作の主体となるものは、いずれにせよ存在するものであるから、以降、主語という言葉は使わず、動作の主体、という言葉を使用することとする。

但し、後述するように、「動作の主体」という表現がふさわしくない動詞文も存在する。しかしながら、ここでは、動作という語の意味を広くとらえ、動詞の主体ということを表すために、「動作の主体」という表現を行う。

1.2 動詞の種類と機能表現(1)他動詞

さて、1.1 で見てきたように、機能表現となりうるのは動詞述語文のみであった。それでは、すべての動詞を機能表現に使うことができるのであろうか。もし使うことができなければ、そこにはどんな問題が潜んでいるのであろうか。

動詞の分類には、その観点からさまざまなものがある。代表的なものに、自動詞と他動詞の分類がある。

日本語の他動詞は、「窓を開ける」「電気を消す」の「開ける」「消す」のように、名詞＋格助詞の「を」という目的語を取るものを言う。一方、「窓が開く」「電気が消える」などの「開く」「消える」のように、名詞＋格助詞の「を」という目的語を取らないものを自動詞という。

但し、空を飛ぶ、グラウンドを走る、部屋を出る、駅へ行く、など、名詞＋格助詞の「を」を伴っているが、これらの名詞＋「を」は、いずれも通過点や出発点、到達点などを表しており、目的語ではない。そのため、飛ぶ、走る、出る、行く、などは自動詞である。

まず、他動詞を使った動詞文が機能表現となるかどうかを検討してみよう。

(8)

- a. 窓を開ける
- b. ドアを閉める
- c. 電気を消す

これらの動詞文を先ほどの「～ために、どうするか」という文に代入してみると下記のようになる。

(9)

- a. 窓を開けるために、どうするか
- b. ドアを閉めるために、どうするか
- c. 電気を消すために、どうするか

これらの表現は文章として一応成り立っている。もっとも、窓を開けるためにどうするか、ドアを閉めるためにどうするか、と問われても手で開ける、閉めると答えられて会話は終わりそうである。しかしながら、そういった常識的な手段ではなく、まったく新しい手段を問うのであれば、いかにもシステムの機能表現らしくなってくる。

さて、他動詞の種類はその意味的特徴から下記のようなものに分類される。(Wikipedia 他動詞より) (*怒る・恐れるは自動詞とされるが、ヲ格を取るケースがあるために掲載)

意味	直接影響	知覚	追求	知識	感情	関係
例	殺す 壊す 温める	見る 聞く 見つける	探す 待つ	知る 分かる 覚える 忘れる	愛する 嫌う 怒る* 恐れる*	持つ 対応する

表 1

これらの動詞を使った動詞文がシステムの機能表現となるか確認してみると下記のような
る。

(10)

- a. ゴキブリを殺すには、どうするか
- b. 壁を壊すには、どうするか
- c. 水を温めるために、どうするか
- d. 月の裏側を見るには、どうするか
- e. クジラの鳴き声を聞くには、どうするか
- f. 徳川埋蔵金を見つけるには、どうするか
- g. 恐竜の化石を探すには、どうするか
- h. * 友達を待つには、どうするか
- i. 昔のことを知るには、どうするか
- j. 絵の真贋の違いを分かるには、どうするか
- k. 試験に出る項目を覚えるには、どうするか
- l. 嫌なことを忘れるには、どうするか
- m. ? 爬虫類を愛するには、どうするか
- n. ? 姑を嫌うには、どうするか
- o. ? 部下を怒るには、どうするか
- p. ? お化けを恐れるには、どうするか
- q. 一戸建てのマイホームを持つには、どうするか
- r. クレームに対応するには、どうするか

これらの文からわかることは、愛する、嫌う、怒る、恐れる、といった感情に関わる動詞は機能表現とはなじまないということである。また、待つ、という動詞も文章とはなっているものの、少し違和感のある表現となっている。

これらの文章を機能表現として違和感のない文章にするためには、下記のように操作を加える必要がある。

(11)

- a. 爬虫類を愛することができるようになるために、どうするか
- b. ? 姑を嫌うことができるようになるために、どうするか
- c. 部下を怒ることができるようになるために、どうするか
- d. ? お化けを恐れることができるようになるためには、どうするか
- e. 退屈することなく友達を待つために、どうするか
- f. 嫁に姑を嫌わせるために、どうするか

g.子どもにお化けを恐れさせるには、どうするか

(11)の a.から d.までは、動詞に「こと」をつけることで、感情を事柄へと変え、それが「できるようになる」という、不可能状態が可能状態になる、という変化の表現とすることで、かろうじて文章として成り立たせることができた。これは、感情というものは、意志的に行うというものではなく、「したい」と思っても、できるものではない、という性格のものであることを表していると言える。

しかしながら、「嫌うことができるようになる」「恐れることができるようになる」というのは、それぞれの文章に必然性が感じられないため、文章としては成り立っているものの、なお不自然なものとなっている。嫌う、恐れる、という感情を持つことができない状態を困ったものとして認識することが困難なものであるためであろう。

一方、愛さなければならないと「頭で」わかっているものの、「心で」そうできない、相手の成長のために、怒らなければならないとわかっているものの、なかなかそうできない、という場面はまれではあるが、存在するため、一応機能表現らしく見えることになっていると言える。

一方、「待つ」という動詞は、ゴール表現を加えることで、機能表現として成り立つものになっている。これは、「待つ」という動作自体は難しいことではないが、退屈する、いらいらする、怒りを覚える、といったマイナスの感情を伴うことが多いため、これらのマイナスの状況を無くす、という点でシステムの機能表現らしくなっているものと言える。

また、f. g.のように、そのままでは機能表現となりにくい動詞も使役形であれば、使用することが可能となる。嫁に姑を嫌わせるシステム、子供にお化けを恐れさせるシステム、というものはあまり想定することはできないが、理論的には存在しうるものと言えよう。

以上のことから、他動詞の場合、感情に関する動詞を除いて、概ね機能表現として使用することが可能であると言ってよいであろう。また、使役形にすれば、感情に関する動詞も機能表現となりうると言えそうである。

1.3 動詞の種類と機能表現(2)自動詞

日本語の自動詞には、自動詞だけが存在するものもあるが、特徴的なものとして、他動詞と対になった自動詞がきわめて多い。それらの例を下記に挙げる

自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
上がる	上げる	暖まる	暖める
当たる	当てる	集まる	集める
高まる	高める	たまる	ためる
捕まる	捕まえる	伝わる	伝える
飛ぶ	飛ばす	詰まる	詰める
隠れる	隠す	壊れる	壊す
写る	写す	直る	直す

表2

これらの自動詞と他動詞をそれぞれ、機能表現となりうるかを判定してみる。

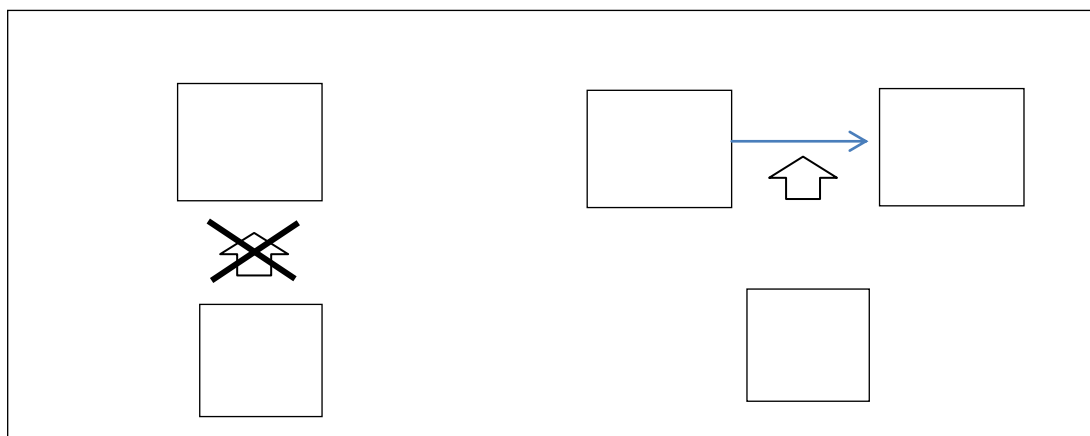
(12)

- a. ? 物価が上がるには、どうするか
- a'. 物価を上げるには、どうするか
- b. ? 冷えた体が暖まるには、どうするか
- b'. 冷えた体を暖めるには、どうするか
- c. ? 宝くじが当たるには、どうするか
- c'. 宝くじを当てるには、どうするか
- d. ? 学生が集まるには、どうするか
- d'. 学生を集めるには、どうするか
- e. ? 名声が高まるには、どうするか
- e'. 名声を高めるには、どうするか
- f. ? 雨水がたまるには、どうするか
- f'. 雨水をためるには、どうするか
- g. ? ねずみが捕まるには、どうするか
- g'. ねずみを捕まえるには、どうするか
- h. ? 情報が伝わるには、どうするか
- h'. 情報を伝えるには、どうするか
- i. * 飛行機が飛ぶには、どうするか
- i'. 飛行機を飛ばすには、どうするか
- j. ? パイプが詰まるには、どうするか
- j'. パイプを詰めるには、どうするか
- k. * 貴重品が隠れるには、どうするか
- k'. 貴重品を隠すには、どうするか
- l. 要塞が壊れるには、どうするか
- l'. 要塞を壊すには、どうするか
- m. * 写真に写るには、どうするか
- m'. 写真を写すには、どうするか
- n. ? 機械が直るには、どうするか
- n'. 機械を直すには、どうするか

上記でわかるように、他動詞と自動詞の対応がある動詞に関しては、自動詞を用いた文は基本的に機能表現とはならない。これは、主格となるものが、「自ら自然に動作する」、ないしは「そうなる」ことを自動詞が表すため、その動作自体に、システムが関与する余地がないためであると考えることができる。

一方、他動詞の場合、主格が対象に対して動作を行う際に、なんらかの形でシステムを利用する余地があるため、機能表現として問題がないものと言える。これを図式化すると下記のようなになる。

図 1.



しかしながら、上記、自動詞の文の中にも、機能表現として成り立つものがある。「飛ぶ」「隠れる」「写る」である。これらは、(12)の文章では、少し違和感のある表現となっているが、下記のような文章では、問題なく機能表現となっていると言えよう。

(13)

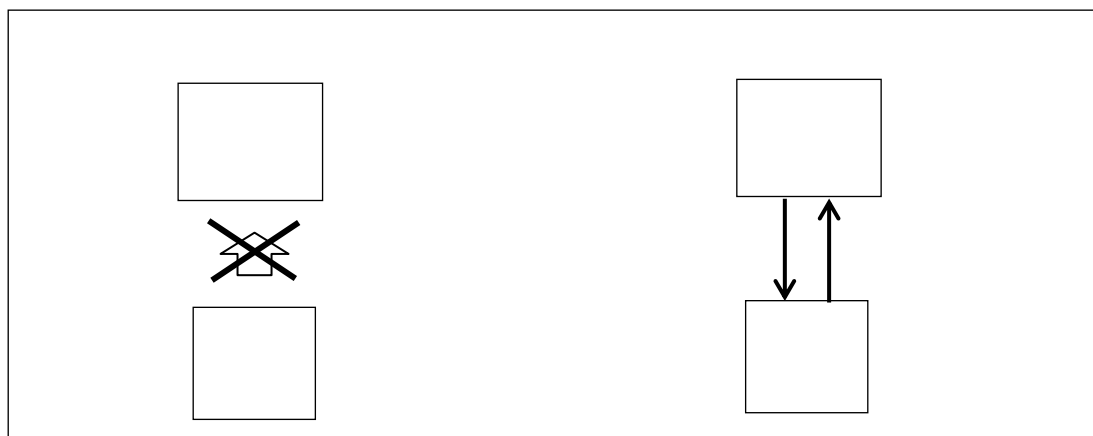
- a.自由に空を飛ぶためには、どうするか
- b.鬼に見つからないように隠れるには、どうするか
- c.実物より見栄え良く写真に写るには、どうするか

これらの動詞の主体は、いずれも人、それも多くの場合、話者である。話者は、多くの文脈において、「(私を含めた人間が)自由に空を飛ぶためには、どうしたらいいかな」と自問しているのである。これが、自分自身を含める場合ではなく、けがをした鳥のことを言う場合は、「けがをした鳥が、自由に空を飛ぶことができるようになるには、どうしたらいいかな」と、動作主が動作可能の状態になるためには、という形で発話することが普通である。

同じく、隠れる、写る、も話者自身を含める(多くの場合は話者自身を指す)場合に使用されることで、機能表現として成立することになる。このように、「私が」という話者自身を主格として含めて文が成り立つ自動詞は機能表現の文として成り立つ。ところが、自動詞の多くは「私が」という主格を取ることができない。いずれも、動作の主体は人以外のものであるか、人であったとしても、話者自身を通常含むことができないことによると言えよう。

このことは、システムの機能表現は、システム的设计者・利用者が何をしたいのか、何ができればよかったのか、ということ表現していることに照合できる。つまり、システム的设计者・利用者が話者自身となりうることに機能表現として成り立つ条件となるのである。

図2



このことは、対となる他動詞を持たない自動詞においても、当てはめることができる。対となる他動詞を持たない自動詞としては、歩く、走る、行く、遊ぶなどである。(歩かせる、走らせる、行かせる、遊ばせる、はそれぞれの自動詞の使役形である)

(14)

- a. 山道を歩くには、どうするか
- b. 長い距離を走るには、どうするか
- c. 宇宙に行くためには、どうするか
- d. 友達と仲良く遊ぶには、どうするか

上記の文はいずれも文章として成り立っている。d.は文脈によっては成立しにくい文ではあるが、なかなか友達とうまく仲良く遊ぶことのできないことを悩んでいる話者が、いかにして友達と仲良く遊ぶことを考える場面では成立する文となる。

これら、対となる他動詞を持たない自動詞は、いずれも意志的自動詞である。そのため、意志的に動作を行うにあたって、方策を考え、何らかのシステムを設計・利用することが可能になる。そのため、システムの表現として問題のないものとなっている。

それに対し、対となる他動詞を持つ自動詞は、基本的に非意志的自動詞である。それぞれ意志的な動作を表すものは、対となる他動詞が担っている。例外的に意志的な意味合いをもつものが、「飛ぶ」「隠れる」などの動詞である。それらの動詞は、主体が自ら動作を

「する」場合があり、非意志的自動詞が内包する、ある状態に「なる」という意味をもつことと対立する。ただし「飛ぶ」「隠れる」も(15)のように、非意志的意味を持っている。

(15)

- a. 突風で屋根が飛ぶ
- b. 月が雲に隠れる

また、「写る」という自動詞は、何かがあるものの意志とは無関係に写ってしまうという、(16)a.のような無意志的意味合いをもともと持つ。しかし、文脈によっては、(16)b.のような意志的動作を持つこともある。

(16)

- a. その写真には、きれいな花が写っていた。
- b. 写真を撮るなら、きれいに写りたい

この場合も、意志的に「写りたい」と表現するのであれば、そこに、なんらかのシステムの力が関与する余地が出てくるのである。

1.4 動詞の種類と機能表現(3) 金田一春彦の動詞の四分類

動詞にはさまざまな分類があるが、金田一春彦は動詞を四つに分類している。

その中には継続動詞、瞬間動詞、状態動詞、第四種の動詞がある。ここでは、まず、継続動詞と機能表現の関わりについて検討してみたい。

金田一春彦の分類した継続動詞とは、動作の完了に時間を要するものである。時間軸に従って、動詞の形態は、「～する」動作前→「している」継続中→「した」完了、へと変わっていく。例として、「読む」「歌う」「働く」「書く」「見る」「食べる」「眠る」「走る」「開ける」「閉める」「飲む」がある。この中で、自動詞は「走る」と「眠る」のみで、あとは他動詞である。

これらを機能表現の判定文にしてみると下記のようになる。

(17)

- a. ラテン語の本を読むには、どうするか
- b. ジャズをうまく歌うには、どうするか
- c. 楽しく働くには、どうするか
- d. 売れる推理小説を書くには、どうするか
- e. 幻の蝶を見るには、どうするか
- f. 本場のインド料理を食べるには、どうするか
- g. ゆっくり眠るには、どうするか

- h. グランドを快適に走るには、どうするか
- i. 鍵のかかった扉を開けるには、どうするか
- j. 閉めるのを忘れた家の窓を閉めるには、どうするか
- k. 楽しくお酒を飲むには、どうするか

これらの文は、特に問題はない。いずれの文も機能表現として成立している。ここに挙げた動詞は意志的動作を表すため、意志を実行に移す際にシステムを利用する余地がある。そのために、機能表現を行うことができる。

次に、瞬間動詞について検討してみる。瞬間動詞は、概ね、動作・出来事が一瞬の間に終了する。動詞の形態は、時間軸に従って、「する」動作前→「した」完了→「している」結果の存続、と変化する。なお、瞬間動詞と分類された動詞の中にも、動作が一瞬で終わらないものがあるという指摘があり、現在は結果動詞や変化動詞という名称に代わっている。

これらの動詞の例として「結婚する」「始まる」「始める」「止まる」「止める」「残る」「残す」「開く」「閉まる」「死ぬ」「起きる」「太る」「痩せる」がある。これらの動詞の中で、他動詞は「始める」「止める」「残る」であり、他は自動詞である。

(18)

- a. なんとか結婚するには、どうするか
- b. ? 新しい学期が始まるには、どうするか
- c. 店を始めるには、どうするか
- d. ? 車が止まるには、どうするか
- e. 暴走する電車を止めるには、どうするか
- f. ? 金が残るには、どうするか
- g. 金を残すには、どうするか
- h. ? 鍵のかかったドアが開くには、どうするか
- i. ? 閉め忘れた家のドアが閉まるには、どうするか
- j. ? ゴキブリが死ぬには、どうするか
- k. 明日朝 5 時に起きるには、どうするか
- l. 新弟子の相撲取りが太るには、どうするか
- m. ダイエット中の人 が 楽に 痩せるには、どうするか

上記の結果からわかるのは、瞬間動詞の中で、他動詞は問題なく文としてなりたっている。一方、自動詞では、意志的に動作を行うことができる可能性のある、「結婚する」「起きる」「太る」「痩せる」である。従って、瞬間動詞というカテゴリーが機能表現となるかどうか、というよりは、意志的動詞か、非意志的動詞かということが、機能表現となるかどうかにかかわってくるのがわかる。

次に、金田一春彦の動詞四分類のうち、状態動詞と第四の動詞について検討してみる。状態動詞とは状態を表すもので、「ている」の形を持たないものを言う。数は多くないが、「いる」「ある」「要る」「できる」「話せる」などである。これらはいずれも自動詞である。そして第四の動詞とは、通常「ている」の形で用いられるものである。数は多くないが「聳えている」「すぐれている」などである。

(19)

- a. ? 野鳥がたくさん公園にいるには、どうするか
- b. ? 公園に静かな場所があるには、どうするか
- c. ? 非常時への備えが要るには、どうするか
- d. ? 富士山に登ることができるには、どうするか
- e. ? アラビア語が話せるには、どうするか
- f. ? 東京タワーが聳えているためには、どうするか
- g. ? 日本の工業技術が優れているためには、どうするか

これらはいずれも文として成立していない。これらはいずれも動作を表すものではなく、主格の状態や属性を表す動詞である。そのため、そこには意志が入り込む余地がない。このため、システムを設計したり、利用する余地というものそこにはない。これがシステムの機能表現として成り立たない理由となる。

結論として、状態や属性を表す動詞は機能表現として使うことができない。継続動詞は、意志的動作を行うことを表すために、機能表現として使用するうえで支障がないように見える。瞬間動詞(結果動詞・変化動詞)は、その動作や変化が意志的に行われるものであれば機能表現として使用することができるが、非意志的な内容を表すものは機能表現としては使うことができなくなっていると言えるようである。

1.5 動詞の種類と機能表現(4)授受動詞と機能表現

動詞の中には、授受動詞と言われるカテゴリーがある。これは、ものの授受を表すとともに、動作の授受的表現にも使用される。具体的には「あげる」「くれる」「もらう」などである。これらの動詞を機能表現に使えるかどうか判定をしてみる。

(20)

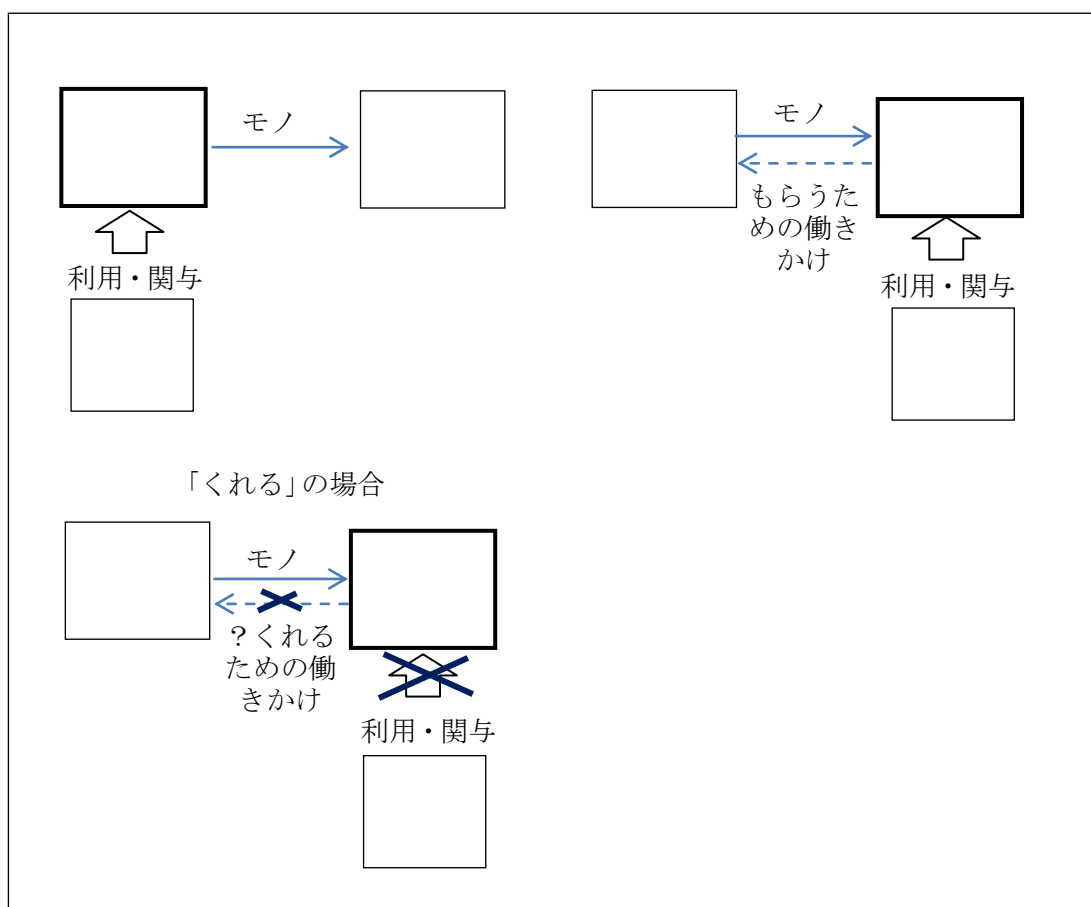
- a. 太郎に気の利いたチョコレートをあげるには、どうするか
- b. ? 花子がバレンタインデーにチョコレートをくれるには、どうするか
- c. バレンタインデーにチョコレートをたくさんもらうには、どうするか

(20)a.と c.は問題なく文として成り立っている。これらは主格として「私が」という話者を想

定することができるため、問題はない。動作は話者である「私」になる。但し、c.では、チョコレートを渡すのは、主格ではなく、第三者である。しかしながら、「もらう」という動詞は、それを受け取ることに焦点をあてた表現であるため、主格が動作するように表現されている。

それに対し、b.では、主格に「花子」という第三者が立てられているように、「くれる」という動作を行うのは、話者ではない。このため、文として成り立っていない。

図3



この関係は、具体的なものの授受だけではなく、動作のやりもらいに関する表現においても成り立つ。

(21)

- a. 太郎に英語をわかりやすく教えてあげるには、どうするか
- b. ?花子が英語を教えてくれるには、どうするか
- c. 花子に英語を教えてもらうには、どうするか

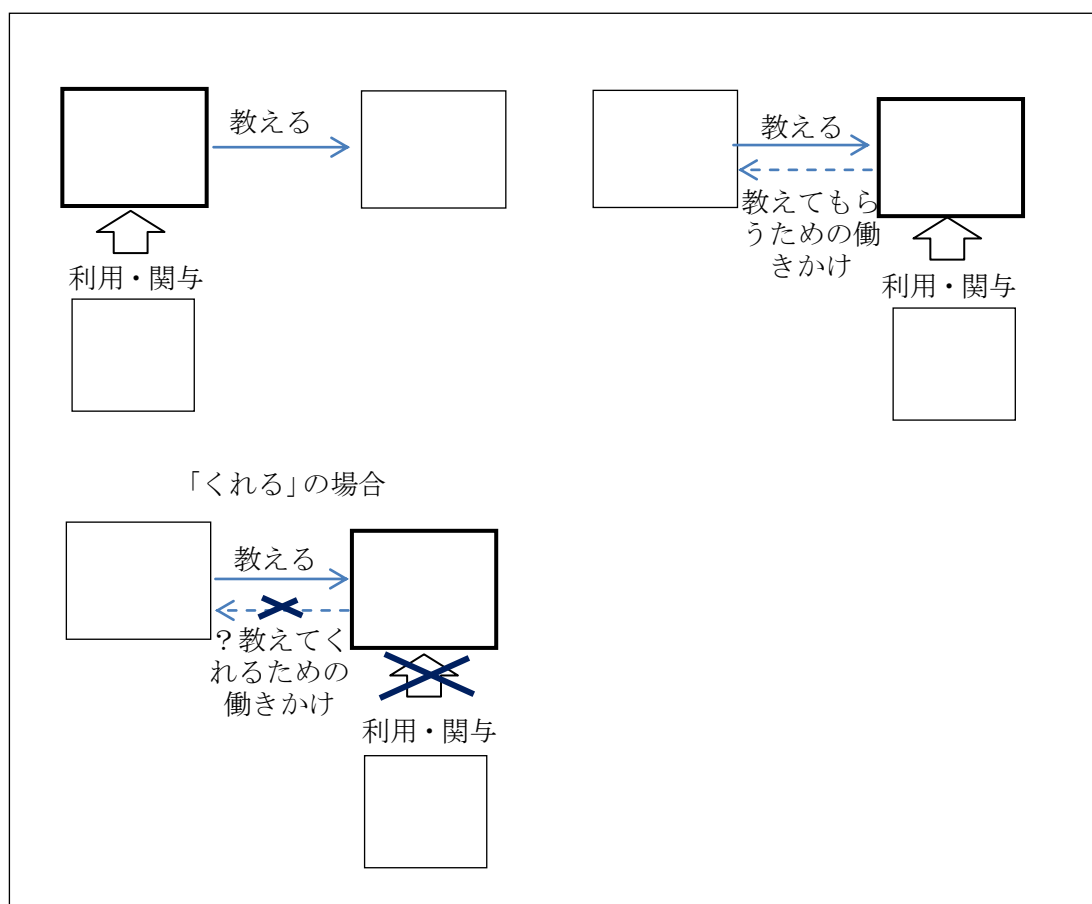
(21)において、a.には「わかりやすく」という副詞を加えているが、これは、「教えてあげる」こ

と自体は、行うか、否か、という二者択一の問題であり、そのための方策を考える余地は通常ない。しかし、「わかりやすく教える」ためにはさまざまな方策を考える余地がある。

一方、「教えてもらう」は、本来、「教える」動作を行うのは、話者である主格ではなく、対象である花子のほうとなっている。そのため、教えるかどうかという意思決定を行うのは花子であって、話者である主格がその意志決定を直接行うことはできない。そのため、花子にその意思決定をさせるためにどうするか、という方策を考える余地がある。

これらの関係を図で表すと図 4 のようになる。

図 4



教えて「あげる」場合は、その動作は話者が行うわけであるから、それをどう行うのか、ということについて話者自身が検討・決定できる。そのため、教えて「あげる」場合には、機能表現として成立することになる。

また、教えて「もらう」場合には、動作自体は、話者ではない第三者になるが、その動作を引き出すための働きかけを行う余地があるため、ここをどうするか、という検討を行う余地が発生するために、機能表現として成立することになる。

ところが、教えて「くれる」場合には、動作を行う第三者に対して、その動作を引き出すための働きかけを行う余地がない。そのため、機能表現として成立しないことになる。

これらのことから、話者が直接動作を行うか、ないしはその動作を引き出す働きかけを行うことができるかどうか、ということが機能表現として成り立つか否か、ということに関わってくることがわかる。

1.6 機能表現と動詞の形態の関係

これまで、さまざまな動詞のカテゴリーによる動詞文が機能表現として成り立つかどうかを見てきた。その結果、まず意志的意味合いを持った動詞が機能表現として成立すること、非意志的意味合いを持った動詞は機能表現としては成立しないことが判明した。そして、意志的自動詞が機能表現となるには、話者が動作の主体となる場合、ないしは、その動作を引き出すために、何らかの形で関わられる場合に限られることがわかった。

この関係を、最初に検討した、他動詞についてももう少し検討してみたい。(22)の各文でわかるとおり、他動詞を使った文においても、「私が」という主格を話者とする場合は問題なく機能表現となる。ところが、話者以外を主格とする文においては、他動詞文においても、機能表現として適切かどうかは微妙になってくる。

(22)

- a. 私がマンモスを狩るには、どうするか
- a'. ?サーベルタイガーがマンモスを狩るには、どうするか
- b. 私が家を作るには、どうするか
- b'. ?ビーバーが巣を作るには、どうするか

(22)の文中、「私」が主格となる a.b.の文は機能表現として特に問題はない。いずれの文でも、マンモスを狩る、家を作る、というプロセスにおいて、なんらかのシステムを設計・利用する余地がある。(マンモスを狩ることは現在ではできないが、旧石器時代の人々にとってはこれらの記述は身近な問題であったであろう)

一方、a'.b'.の文は、文としては成り立っている。サーベルタイガーは、マンモスを狩るときにどのようにふるまうのか、ビーバーは巣を作るときにどのように行動するのか、という生態を問う文脈において、意味の通じる文となっている。しかしながら、これらの文において、システム設計やシステムの利用を行う余地はない。

ビーバーの巣というものは、ビーバーにとってひとつのシステムではあるが、話者の視点はビーバーとビーバーのシステムとは関係性を持たない。つまり、話者が動作の主体となる場合、ないしは、その動作を引き出すために、何らかの形で関わられる場合ではないのである。

ここで、話者が動作の主体となる場合、ないしは、その動作を引き出すために、何らかの形で関わられる場合とは、「私が」という形で話者が主格として表されている場合である。しかし、通常、機能表現には「私が」という話者が主格として表されることはない。

(23)

- a. 私がマンモスを狩るには、どうするか
- a'. マンモスを狩るには、どうするか
- b. 私が家を作るには、どうするか
- b'. 家を作るには、どうするか

通常、システムの機能表現として表されるのは、(23)a' b'のように主格を欠いた形式である。この場合、主格は「システムが」であり、それが記述されていないだけである、と説明されることが多い。しかし、その「システム」の所有・設計・利用・発案、を行っているのは、話者、もしくはその関係者であることになる。そのため、「私が」と話者を主格とした文が機能表現として問題がないものになる。

ところが、このことは、冒頭に述べた、機能表現のふたつの形式のうち、下記 a.の表現と対立する。(1)において、b.の文には主格がなく、この文の主格には「私が」ないし私が利用する「システムが」というものが仮定される。しかし、a.の文には「学生が」という主格が表現されている。((1)a.の文は学生自身が話者であるケースもありうる)

(1)

- a. 学生が勉強する
- b. 学生に勉強させる

この、(1)a.の文と、(22)a'.b'の従属節部分との違いとは一体何なのであろうか。これらはいずれも話者以外の主格を取る。(1)a.の「勉強する」は自動詞であるが、(22)の a' b'の従属節の述語部分は、他動詞である。しかし、それが機能表現となるか否かを決定する要因ではない。動詞のカテゴリの違いが問題であるのであれば、(22)a.bの従属節も機能表現とならないはずである。

(1)a.の文と、(22)a'.b'の従属節との間の違いとは、文法的、外形的な問題ではない。(22)a'.b'の従属節が表している意味は、自然現象である。そこには、話者が自然現象へ関わることの含意はない。一方、(1)a.の文の場合は、学生の動作を述べている。ここにも話者が学生の動作に対する関わりを含意は表面上ない。

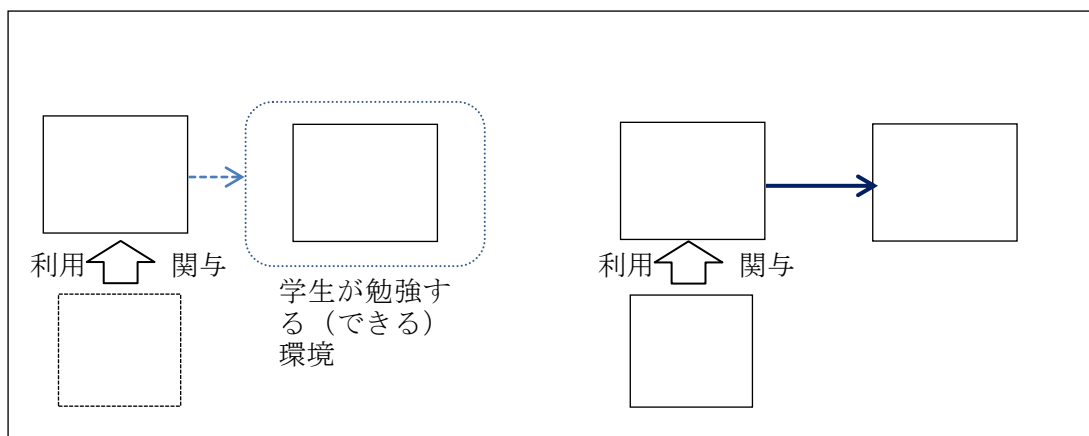
しかしながら、自然現象の場合には、放っておいても、それらの自然現象は滞りなく起こるのであろうという前提がある。それに対して、教育に関わるものの中では、「学生が勉強しない」ことへの悩みが前提としてある場合が多い。そのため、「学生が勉強しない」状況をなんとか「学生が勉強する」状況へと変えたい、という前提が隠れている可能性がある。あるいは、「学生が勉強する」にあたって、さまざまな障害が存在している、という前提があるのかもしれない。そして、これらの点において、(1)a.の従属節がシステムの機能表現として認められることになるのである。

従って、自然現象である(22)a.b.の従属節も、それがなんらかの形で妨げられており、そ

れを改善し、滞りなく自然現象が起こるようにする、という文脈においては、システムの機能表現として認められうる可能性があることになる。それは、自然破壊が進んでおり、それを防止し、自然環境を守らなければならない、という場合である。

つまり、(1)の a.b.文が意味する事柄は、次のような構造となる。

図 5



このように、「学生が勉強する」という機能表現の表す事柄は、この表現中には登場しない話者自身が、システムを使って、学生が勉強するようになる、あるいは勉強できるようになる環境を作る、整える、という文脈において、機能表現となるのである。

一方、「学生に勉強させる」という機能表現の表す事柄は、使役主である話者が、動作主である学生に対して、勉強するように明らかに働きかけているのである。この過程において、使役主である話者は、なんらかの形でシステムを設計したり、利用したりするのである。

しかしながら、いずれの場合においても、動作主である学生が、使役されていることを認識しているか否か、あるいは、勉強するような環境を作られていることに気付いているか否か、ということはここでは問われない。まったく使役されていることに気付かないまま、学生が勉強をしていたり、知らないうちに、作り変えられている環境において勉強している場合も想定されるのである。

さてこのように、(1)a.と b.の文は、外形的には異なっているものの、その表す内容は近接しているものである。このいずれの表現を選択するかということは、システム設計にあたって設計者の好みによって選択されているように見える。それでは、その好みの分かれる理由については、後段で再度検討することとする。

2.機能表現と理由・原因の表現の関係

ワークデザインの初学者にとって、一番の難関は、機能の記述がうまく見いだせないというところである。ここで躓く初学者は実に多い。機能の記述を見出すことが困難な理由がわかれば、うまく指導できる方策を見出すことができる可能性が出てくる。ここでは、言語学的アプローチから、この問題を取り上げてみたい。

2.1 機能表現を行う際によくある間違い

機能表現を行う際に、初学者がよく行う誤りが、目的ではなく、理由・原因を答えてしまう、というものである。理由や原因と目的の区別がうまくできないため、機能の記述を行うことができないケースがとても多いようだ。それでは、どのような誤りが多くみられるのであろうか。

例えば、風呂を題材にとり、初学者に機能展開を行うように指導する場合を想定してみる。ここでは、機能のレベルの高低は問わず、とりあえず、機能表現として成り立っているかどうかを見ていくこととする。

風呂の機能を記述する課題を記述する課題を初学者に与えると、よく出てくる回答が下記のようなものである。

(24)

- a. 疲れているから
- b. 暖まるから
- c. 清潔になりたいから
- d. 汗をかいたから
- e. お湯を溜める
- f. 深さがある
- g. 気持ちがいいから

これらの回答の語尾に着目すると、e.f.を除いて、いずれも「から」というものが使われている。これらの回答のうち、「疲れているから」「汗をかいたから」という答えはあまり機能の表現らしくはない。どちらかという、理由と呼べるものに近いようである。

一方、「暖まるから」「清潔になりたいから」という回答は、機能の表現らしく感じられる。目的を答えているように思えるからである。風呂に入る、その目的は何かと言うと、暖まるから、清潔になりたいから、と答えるのはかなりつじつまがあっているようである。

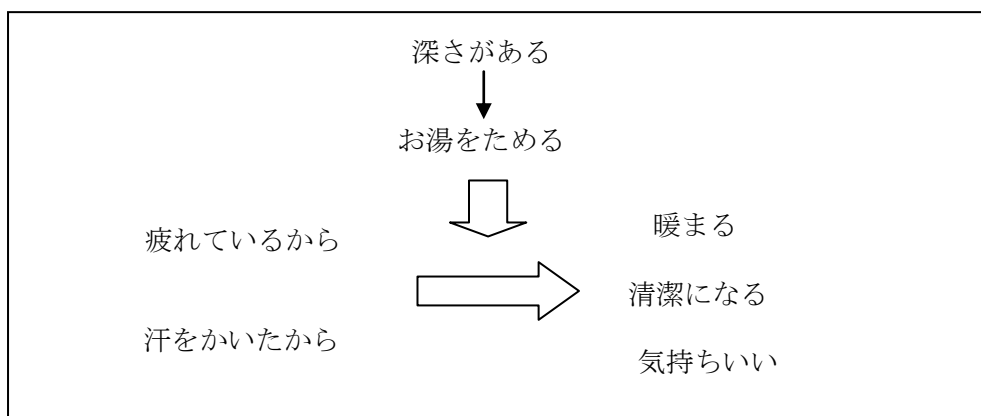
(27)の回答のうち、「お湯をためる」というものは、風呂のひとつの機能と言ってよさそうである。しかし、目的かどうか、と問われるならば、一般的感覚からすると、あまり目的という感じはしない。一般的には風呂の目的を問われると、風呂に入る目的を想定してしまうことが多いが、「風呂に入る」目的が「お湯をためる」ことにはなく、目的と機能のレベルが逆になっているからである。

「深さがある」という回答は浴槽の形状を記述したものであると言える。このように、対象の形状や属性を述べることは機能を記述させる課題において、たびたび見受けられる。これは機能の表現とは少し異なっているようにみえる。しかし、風呂の特性から言って、「深さがある」と「お湯をためる」との間には密接な関係があることは間違いない。

また、「気持ちがいいから」という回答はかなり目的の表現に近く、機能の表現となるもののようにもみえる。また、この回答にも「から」が使われている。

これらの回答を、それぞれの関係性に着目して整理してみると、まず、「深さがある」ことによって、「お湯をためる」ことができ、「疲れているから」・「汗をかいたから」そのお湯につかり「暖まる」ことができ、「清潔になる」ことができ、「気持ちいい」状態になることができるのである。このようにこれらすべての回答は図6のように記述することができる。これによって風呂というシステムを取り巻く状況を大雑把であるが、説明することができる。

図 6



さて、これらの回答をプラス的な要素とマイナス的な要素という観点で、更に分析するならば、「深さがある」という回答は中性的な記述である。なんらかの役にたつというプラスの要素になるかどうかはわからないものの、そういった形状をしている、という浴槽の属性を単に記述しているようである。

これに対して、「お湯をためる」という回答は、そのままの文面を見る限り、ただ単にお湯がたまる、という状態を述べているもので、中性的な記述のように見える。ただ、浴槽はお湯をためて使うものだ、という人為的な作為を考慮するならば、ややプラス的な要素を述べたものとも取れる。

次に「疲れているから」と「汗をかいたから」という回答は、どちらかという人が良くない状態にある、というマイナス的な要素を記述している。その後の、「暖まる」「清潔になる」「気持ちいい」といった回答は、すべて人がよい状態になったか、よい状態にあるというプラス的な要素を記述するものとなっている。

これらのプラス・マイナスの要素を考えていけば、人はまず、なんらかマイナスの状態（疲れている・汗をかいた）にあることを自覚し、プラスの状態（暖まる・清潔になる・気持ちいい

い)になるために、なんらかのもの(たまったお湯)を使う。そして、なんらかのもの(たまったお湯)を実現するためのメカニズム(深さがある)がそこには必要である、ということになる。

人間の行動・活動とは、すべてなんらかのマイナス面を認識したうえで、その解消のために行うものと言える。もっともプリミティブなレベルのマイナス面としては、飢えや渇きといったものがある。また、金銭的な面での不足感というマイナス面を解消するべく、人は働き、物質的な面で充足したとしても、精神的な欲求に基づき、さまざまな活動を行う。そういった精神的な欲求というものも、実はなんらかの形で満たされていないというマイナス面を解消したい、という形で人間を突き動かしているのである。

その面で、マイナス的な要素を含む、「疲れているから」「汗をかいたから」という回答は、人を風呂に入ろうという気を起こさせる誘因を表しているようである。ここで一步踏み込んで、マイナス面を解消することを、目的ないし、機能表現である、とするならば、「疲れをとる」「汗を流す」ことこそが目的の記述であり、機能表現となりうるものと呼べそうである。

ところが、われわれは普通、「疲れているから」「汗をかいたから」というものを、風呂に入る「理由」と呼ぶ。一方、「疲れをとる」「汗を流す」というものも、風呂に入る「理由」と普通は呼ぶのである。マイナス的な要素を記述する文も理由であり、そのマイナス的な要素を解消することを記述する文もまた理由なのである。ここで、理由と目的との境界があいまいになってくる。初学者が目的の表現をうまく見出すことができない理由がここにある可能性がある。理由と目的の関係については、後段で再度検討をしてみたい。

2.2 なぜ、と問うことの意味

さて、風呂の機能として、「深さがある」という回答が出てくることがあるのだが、そういった回答はいきなり出てくることは少ない。むしろ、「お湯をためる」と記述したあとで、同一人物が「深さがある」と記述することが多い。

そこで、なぜそのような記述をしたのか、と記述した本人に尋ねてみたところ、「浴槽はお湯をためるものである。そして、なぜお湯がたまるのか、というと、深さがあるからである」と回答を行ったことがある。

目的の表現を導くには、「なぜ？」と問うのではなく、「それは何のため？」と問うように指導しても、いつのまにか「なぜ？」と自問している学習者がみられる。その理由は、学習者にとって、「それはなんのため？」と問うことと、「なぜ？」と問うことは等価であるためである。

われわれは、目的を問う際にも、普通「なぜそれを行うのか」という形で問うことが多い。「なんのためにそれを行うのか」という形で問いかけることは一般的には少ないのである。

さて、さきほどの「浴槽はお湯をためるものである。そして、なぜお湯がたまるのか、というと、深さがあるからである」という回答には非常に興味深い記述が見える。それは、前の文には「ためる」という他動詞が使われているのに対し、後ろの文には「たまる」という自動詞が使われていることである。

この場合は、たまたま混乱して他動詞と自動詞を取り違えた可能性もある。しかしながら、分析的な考察を行う場合には、自動詞を使って検討するほうが自然であるかもしれない。「なぜお湯をためるのか」と他動詞を用いて問うならば、お湯をためることによって何をしたいのか、という目的、もしくは、どうしてお湯をためたかったのか、という理由を答えることになりそうである。

一方、「なぜお湯がたまるのか」と自動詞を用いて問うならば、お湯がたまるしくみとはいったい何なのか、というメカニズムを答えることになりそうである。メカニズムには、因果関係が存在し、ある現象を引き起こす原因と関係性が存在する。メカニズムを問うということは、原因を問うことでもある。

ここでわかることは、目的や理由を問う場合も、「なぜ」と問い、メカニズムや原因を問う場合も「なぜ」と問うことである。そして、「なぜ」のあとに他動詞文を続けると、目的や理由を問うことになり、「なぜ」のあとに自動詞文を続けると、メカニズムや原因を問うことになるようである。

このことが、一般的に他の動詞においても成り立つものであるのかどうか、確認してみたい。下記(25)において、それぞれ対となる他動詞と自動詞を使い、「なぜ」で問う文章を作ってみた。それぞれのペアにおいて異なるのは、格助詞に「を」を使うか「が」を使うか、他動詞を使うか、自動詞を使うか、ということだけである。

(25)

- a.なぜそうめんを流すのか
- a'.なぜそうめんが流れるのか
- b.なぜかんぬきを外すのか
- b'.なぜかんぬきが外れるのか
- c.なぜ障子を破るのか
- c'.なぜ障子が破れるのか
- d.なぜ卵を割るのか
- d'.なぜ卵が割れるのか
- e.なぜ金を残すのか
- e'.なぜ金が残るのか
- f.なぜ文書を戻すのか
- f'.なぜ文書が戻るのか
- g.なぜごみを散らかすのか
- g'.なぜごみが散らかるのか
- h.なぜ意見をまとめるのか
- h'.なぜ意見がまとまるのか
- i.なぜシャツに色を染めるのか

- i'.なぜシャツに色が染まるのか
- j.なぜお湯を沸かすのか
- j'.なぜお湯が沸くのか
- k.なぜ金利を増やすのか
- k'.なぜ金利が増えるのか
- l.なぜ頭を揺らすのか
- l'.なぜ頭が揺れるのか
- m.なぜ木の葉を浮かべるのか
- m'.なぜ木の葉が浮かぶのか
- n.なぜ夢をかなえるのか
- n'.なぜ夢がかなうのか
- o.なぜチーズを裂くのか
- o'.なぜチーズが裂けるのか
- p.なぜ柱を立てるのか
- p'.なぜ柱が立つのか
- q.なぜタオルを乾かすのか
- q'.なぜタオルが乾くのか
- r.なぜお茶を冷ますのか
- r'.なぜお茶が冷めるのか
- s.なぜ服装を整えるのか
- s'.なぜ服装が整うのか

(25)でわかることは、いずれも他動詞を使い、「なぜ」と問うた場合には、目的もしくは理由を問うているようであること、自動詞を使い、「なぜ」と問うた場合には、メカニズムを問うているようであることである。しかし、辞書形(流れる・聞く、のように、語末が-u で終わる形:辞書にはこの形で記載される)の自動詞を使って問う場合、原因を問う感じはしない。

例えば、a'において、「なぜそうめんが流れるのか」という問いでは、そうめんが流れるメカニズムが何なのか、ということをお問うている感じがする。これをタ形(タ形は多くの場合、過去時制において用いられるが、そうでない場合にも用いられる)の自動詞を使い、「なぜそうめんが流れたのか」と問うならば、メカニズムを問う場合も含め、原因を問う感じもする。

辞書形の自動詞を用いて問う場合には、普遍的な法則に基づく、一般的なメカニズムを問う感じが強い。「そもそも、流しそうめんのシステムにおいて、どうしてそうめんは流れるのか」という、原理を考える問いに用いられるニュアンスが強く感じられるのである。

それに対して、タ形の自動詞を用いて問う場合には、特定の事件のメカニズム、もしくはその現象を引き起こした原因を問う感じがある。「さっきは、どうしてそうめんが流れたのか」ということを問うニュアンスがある。

具体的な文脈を想定するならば、そうめん流しをしようとしていて、なかなかうまく流れない状態が続いたにも関わらず、ある特定のそうめんだけはうまく流れた、それはなぜなのか、そうめんが流れたときのメカニズムはいったい何だったのか、ということ进行問う場面が想定される。

また、別の文脈を考えるならば、まだそうめんを流す予定ではなかったのに、なぜかそうめんが流れてしまうという事態が発生した、その事態を引き起こした原因は何だったのか、原因をつくった人物は誰なのか、ということ进行問う場面を想定することができる。

このように、自動詞を使って「なぜ」と問うた場合、辞書形を使うとメカニズムを問うことになり、タ形を使うと原因を問うことになる。いずれにせよ、自動詞を使う場合には理由や目的を問うことにはならない。

さて、前述の自動詞を使って「なぜ」と問うた学習者は、偶然、自動詞を使ってしまったのであろうか。システムの目的について、段階を追って上位に展開する課題を課した場合に、メカニズムを分析する形で記述する学習者は時折だが確実に存在する。そういった場合、自動詞を使い、「なぜ」と考えてしまった可能性を否定することはできない。

われわれは、起こった現象のメカニズムを分析し解明する考え方には慣れている。問題が起こった際に、われわれは問題が起こったメカニズムを明らかにし、問題を解決しようとする。それは科学的な手法による場合もあるが、非科学的な手法による場合もあるであろう。

科学的な教育が普及する前の時代においては、天災の発生は、神や悪霊が超自然的力を発揮するというメカニズムが働いた結果であろうと考え、問題解決を図るために、人々は神を祀り、悪霊を退散させるよう神仏の力を借りようとした。このように「なぜ」ある現象が起こるのか、というメカニズムを分析することは、われわれにとって自然な考え方である可能性が高い。そして、そういった際に、われわれは、自動詞を使って「なぜ」それが起こるのか、あるいはそれが起こったのか、というメカニズムと原因を追究している可能性がある。

これは、自動詞・他動詞の対立のある動詞の場合であるが、一方、対となる他動詞を持たない自動詞の場合にはどうなるのであろうか。例えば、「走る」「泳ぐ」「行く」などの対となる他動詞を持たない自動詞の場合について考えてみたい。これらの動詞を使い、「なぜ」と問いかけてみることで確認をすると下記のようなになる。

(26)

- a.なぜ太郎は走るのか
- a'.なぜ車は走るのか
- b.なぜ太郎は泳ぐのか
- b'.なぜロボットの魚は泳ぐのか
- c.なぜ太郎は駅に行くのか
- c'.なぜロボットの掃除機は部屋の隅に行くのか

(26)において、それぞれ人と非生物を使い、「なぜ」と問いかけてみた。但し、「走る」以外の動詞「泳ぐ」「行く」を述語にとれる非生物はほとんど存在しないので、多少無理のある記述となってしまった。

ここでわかることは、人に対して「なぜ」と問うと、理由や目的などを問うている感じがするのに対して、非生物に対して「なぜ」と問うと、そのメカニズムを問う感じになることである。ただし、c'のロボット掃除機の場合は目的や理由を問う感じもする。これは、修飾語を伴わないと文にならないため、「部屋の隅に」という修飾語を付加したためと思われる。同様に、a'.b'.にも修飾語を付加してみると下記のようになる。

(27)

- a'.なぜ車は道路の左側を走るのか
- b'.なぜロボットの魚は海を泳ぐのか

(27)でわかるように、これら、非生物を使って、これらの自動詞文を作ると、目的や理由を問う感じが出てくる。しかし、同時に、「どのようなしくみによって、車は道路の左側を走るのか」、「どのようなしくみでロボットの魚は海を泳ぐのか」というメカニズムを問う感じもやや残っている。

人について「なぜ」と問うて、メカニズムを問う感じがしないのは、通常、われわれは人が「走る」「泳ぐ」「行く」メカニズムを問題にすることはないからではないだろうか。同じく、これが生物であるならば、それらの動作のメカニズムをあまり問題としないため、人と同じ扱いになるのかもしれない。一方、非生物に対して「なぜ」と問われるならば、非生物は通常、理由や目的を持って動作するわけではないために、動作のメカニズムに焦点がいくと考えることができる。

しかしながら、修飾語を付加し、動作の仕方を限定・特定する場面では、メカニズムとともに、その特定の場面では、なんらかの意図が背後に隠れているように感じられる。例えば、「車が道路の左側を走る」ようにしたのは、社会的なルールに基づくものであり、そのルールを作った人の意図というものがどこかにあるはずだ、という前提をわれわれは持つてしまう。

同様のことは、ロボットの魚やロボットの掃除機にも言える。これらのロボットがどうやって動作するのか、というメカニズムを問題とすることがわれわれの思考にあるが、それと同時に、ロボットを作った人の意図が何なのか、というところも問題としてあがってくる。

それでは、生物の場合は、すべてメカニズムが問題とならないのであろうか。それについて、更に検討してみる。

(28)

- a.なぜ人は歩くのか
- b.なぜセイヨウヒナギクの種は歩くのか

c.なぜ ASIMO は歩くのか

ここでは、人と植物のセイヨウヒナギク、ロボットの ASIMO を使って「なぜ」と問いかけてみた。(セイヨウヒナギクの種が歩くという事実はない)これらの文から受ける感じは、人の場合は、理由や目的を問う感じになるのに対し、植物の場合と ASIMO の場合は、理由や目的を問う感じが出てきたが、メカニズムを問う感じも残っている。

これは、植物も生存のために、さまざまな活動を行っており、その動作にはなんらかの理由や目的があるのであろう、という前提とともに、通常は動作しないことを植物がしているために、そのメカニズムは何なのか、ということが問題となってくるためと考えられる。

一方、ロボットの ASIMO の場合は、ロボットを作った人の意図がどこかにあり、なんらかの目的や理由があって、ASIMO を歩かせているのであろう、という前提とともに、どのようなメカニズムで歩くのか、ということも同時に疑問として出てくるためと考えられる。

この文をもっとメカニズムに着目する感じにするには、それぞれの動詞を可能形にしてみるとよさそうである。

(29)

a.なぜ人は歩けるのか

b.なぜセイヨウヒナギクの種は歩けるのか

c.なぜ ASIMO は歩けるのか

(29)で記述した通り、動詞が可能形になると、文脈の縛りがない場合、いずれもメカニズムを問う感じが強くなる。その動作を可能にしているのはどんなメカニズムなのか、ということも問う感じが強くなる。

また、ASIMO については、開発者の並々ならぬ情熱や努力というような、背景の物語に思いをはせる場合に、理由を問う感じが出てくる。開発者の意志や苦勞など、さまざまな事柄を理由として、ASIMO は歩けるのだ、という前提が見えてくるのである。

さて、われわれは、「なぜ」と問うことによって、原因やメカニズム、理由、目的を問うていることをこれまで見てきた。そして、それは対象の違いや、使う動詞、そしてその形(辞書形・タ形)によって使い分けられていることなどを見てきた。それでは、原因やメカニズム、理由、目的の違いとはいったい何なのであろうか。これについて次に考察を加えてみたい。

2.3 理由・原因・目的とは

さて、ここまで、理由と原因、目的という言葉を使ってきたが、これらの言葉の定義とは一体何なのであろうか。あるいはそれらの関係性とはいったいどうなっているのであろうか。手元の辞書(新選国語辞典小学館)を引いてみると下記のように記載されている。

理由:ことのわけ。ゆえ。わけあい。事由。

それでは、「わけ」の項目を引いてみると、②理由。事情。いきさつ。と記載されている。それでは、「いきさつ」を引くと、ことのみゆき。経過。事情とある。結局、辞書を引いてみてもよくわからない部分が残ってしまうが、理由が現れるためには、なんらかの「こと」が起きていることがわかる。

原因のほうには、物ごとのおこり・もと、⇔結果、とある。こちらにも「こと」が現れている。なんらかの「こと」が起こったもとの発端が原因であるといえるようである。

一方、目的の方は、事をなしとげようとする目当て、とある。こんどは、こちらに「こと」が現れてきている。こちらには、なんらかの「こと」をなしとげようという意志そのものを、目的と呼ぶようである。

さて、朝、通勤途中の道を駅へと走っていく人に「どうして走っているのですか」と尋ねてみる状況を考えてみよう。駅へと走ってまで急ぐ人が立ち止まって回答してくれることはあまり期待できないが、この人物が答えてくれるとしたら、次のような答えを想定することができる。

(30)

- a.寝坊してしまったんです。
- b.会社に遅れそうなんです。
- c.昨夜、飲みすぎてしまって…

(30)a.b.は理由を答えているようである。寝坊してしまったという「こと」が発生し、それによって、会社に遅れそうになるという「こと」が引き起こされている。これらを、走って駅に急ごうとする理由と言ってよさそうである。

この場合、寝坊してしまったという「こと」と、会社に遅れそうになるという「こと」は非常に近接している。寝坊したことが判明した段階で、既に会社に遅れそうになっていることは明らかである。このふたつの「こと」は、ほとんど同じ「こと」としてわれわれは通常認識している。

しかし、これらを「寝坊をしたこと」を原因とし、「会社に遅れそうになること」を結果と考えることもできる。会社に遅れそうになってしまったのは、寝坊が原因である、ということもできるのである。これは、時間的な前後関係があり、ひとつのことが引き起こした別のこととして事態を認識する場合に原因と結果の関係が見えてくる。

一方、(30)c.は、原因と言ってよさそうである。昨夜飲みすぎてしまったことと、会社に遅れそうなこととは時間的にも、因果関係のうえでも、一体のものと認識できるほど近い関係にはない。

飲みすぎてしまったことは、夜に起こったことであり、一夜が過ぎて、朝になって寝坊ということが起きている。時間的に少し間がある。また、飲みすぎたからといって、必ず寝坊をするということはない。二日酔いで頭が痛い、なんとか起きることができる、という場合もあるだろう。

また、寝坊の原因は飲みすぎだけではないかもしれない。目覚まし時計をセットすることを忘れたという、別の原因が存在している可能性もある。それが飲みすぎによるものであったとしても、寝坊をした直接の原因は、目覚まし時計をセットし忘れたこと、という関係が成り立ってしまう。更に、飲みすぎた原因は、日ごろの仕事のストレスがあるのかもしれない。日ごろのストレスがたまりすぎていたために、ついつい飲みすぎたのかもしれない。

このように、ある事態が起こった原因にはさまざまなことが関係していることがよくある。また、ひとつの原因には、その原因を作った更に原因があるものである。原因の連鎖によってひとつの事態は起こってしまう。

その中で、われわれが困った事態だと認識したものがわれわれの行動の理由となる。そして、その事態を解消することを目的として、われわれはなんらかの行動を起こす。行動そのものが困った事態を収拾するための行動であり、それが目的となるはずである。

しかし、これまで、目的の表現は直接的に表れていない。(30)の発言も原因と理由が述べられているようであり、目的とはいいがたい表現となっている。この場合の目的とは一体何なのであろうか。

この場合、飲みすぎたことによって寝坊をしてしまい、会社に遅れそうになったために走っているのであるから、駅へと走る目的は、まず、「いつも乗っている電車に乗ること」であり、更にその目的は、「時間どおりに会社に到着すること」であろう。ただし、これらの表現はなかなか言葉として現れることはなさそうである。なぜこれらの表現が言葉として現れにくいのかということは、次に検討するところにして、原因・理由・目的を整理してみると次のようになるようである。

(31)

原因:飲みすぎしてしまったこと

理由1:寝坊してしまったこと

理由2:会社に遅れそうであること

行動:駅へと走っていくこと

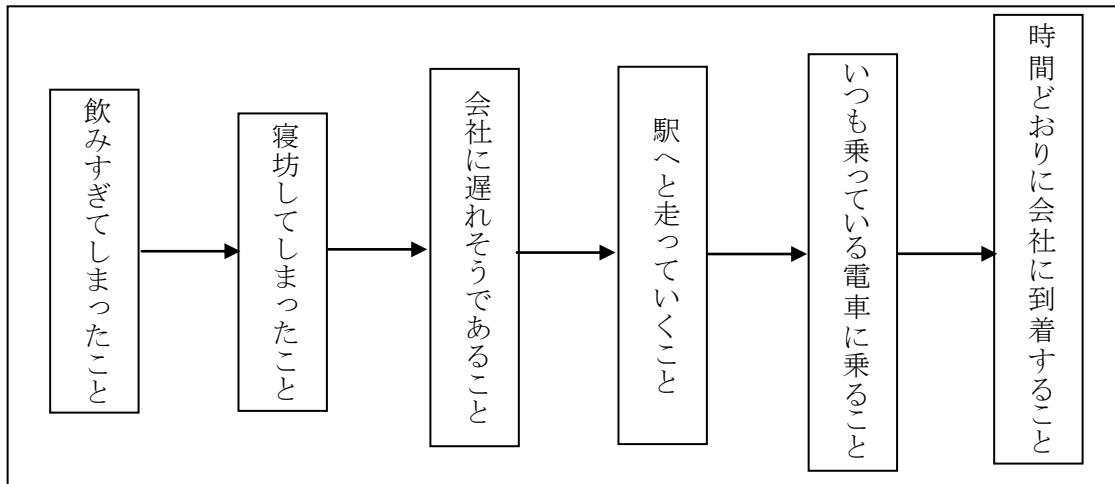
目的1:いつも乗っている電車に乗ること

目的2:時間どおりに会社に到着すること

ここで、理由を、行動を起こさなければならない直接的な事態であるとするならば、「会社に遅れそうであること」のみが理由となりそうである。そして、理由1の「寝坊してしまったこと」は理由2「会社に遅れそうであること」の直接的原因とすることができそうである。

これらの関係を図示すると、図7のようになる。

図7



さて、これらの関係を見るならば、当然のことながら、原因のほうが、時間的に先であり、その原因によって理由が発生し、行動が起こり、そして目的へ至る、つまり目的が時間的に後になっている、ということがわかる。この関係は、原因や理由を起点とし、目的を到達点とみなすことができる。われわれは、理由を起点とし、目的を到達点として行動を起こすわけである。

この関係は、われわれが、理由を表現するときに、寝坊した「から」という本来、起点を表す助詞を用い、目的を表現するために、いつも乗っている電車に乗るため「に」という、本来、到達点を表す助詞を用いることと符合する。

このことは、池上義彦によって指摘されているとおりであるが、池上によると、英語の場合、理由を述べる際に、for this reason のように、日本語で「から」と表現するところに for が用いられるが、古くは英語においても from が使われていたという。また、目的に関しては、to catch the train とこちらは日本語と同じく明らかに到達点を表す to が to 不定詞の形で使用されている。

なお、日本語の「から」は格助詞としての働きと、接続助詞としての働きがある。格助詞としての「から」は、家から駅へ、という場合などの起点や、米から作った、という場合の原材料、青から赤へ、という場合の変化の前などの場合を表す。接続助詞としての「から」は複文構造の従属節に使われ、飲みすぎたから、という場合の理由原因を表す用法がある。

しかしながら、われわれは、目的らしきものについて述べる際も、「から」という起点を表す格助詞を使う場合がある。例えば、駅へ急ぐ人の回答でも、「会社に遅れたくないから」という言葉はよく聞かれる表現である。この表現は、まず、「会社に遅れそうである」という状況が存在し、それに対して「会社に遅れたくない」という意向が発生する。その意向が出発点となって行動を起こすため、その意向に対して「から」という起点を表す接続助詞を使用する形となっている。

さて、われわれは、駅へ走って急ぐ人に向かって「なぜ走っているのですか？」と尋ねる

ならば、多くの場合、原因や理由に関する回答が返ってくるようである。つまり、われわれは、多くの場合、「なぜ」と問いかけるならば、起点について述べる傾向にあることがわかる。

これが、システムの機能表現を記述する際、初学者にとっての学習の困難さを感じさせるひとつの原因であるかもしれない。次に、なぜわれわれは「なぜ」と問われたときに、起点について述べる傾向にあるのか、ということについて検討してみたい。

2.4 目的が表現されにくい理由

さて、駅に急ぐ人の場合、原因や理由は表現されやすいが、目的は表現されにくいということを見てきた。これは状況によって変わるものであろうか。ここでは、この点について考えてみる。働く人に「なぜ働くのか」と尋ねてみるならば、次のような回答が予想されるであろう。

(32)

- a.生活のため
- b.働かないと食べていけないから
- c.能力を活かせるから
- d.人の役に立ちたいから

(32)において、a.は目的を述べているようである。「生活を維持するため」という表現であるならば、より目的らしさが出てくる。それに対して b.は理由が述べられているようである。「働かなければ食べていけない」という事態が述べられている。c.d.は目的が表されているように見える。能力を活かす、人の役にたつ、という表現であれば、より目的らしくなってくる。

このように、働く「理由」を尋ねた場合、「目的」が述べられることが多くなることが予測される。実際に厚生労働省「平成 17 年版 働く女性の実情」を見ると、次のような結果となっている。

「収入を得る必要が生じた」(26.1%)

「時間に余裕ができた」(16.6%)

「健康を維持したい」(15.8%)

上記、平成 17 年版 働く女性の実情による、就業希望者の理由の中で、「収入を得る必要が生じた」というのは、理由のようである。「収入を得る必要がある」という事態が発生した、それが起点となって、仕事を探す、という行動に出ていることがうかがえる。

また、「時間に余裕ができた」というのも理由のようである。「時間に余裕ができた」という事態が生じたために、その余裕を何らかの形で活かすために、仕事を探す、という行動に出ていることがうかがえる。この場合、「時間の余裕を活かしたい」と意向形にするならば、目的の表現となりそうである。

そして、もうひとつ述べられている、「健康を維持したい」というのは、これは目的の表現のようである。「健康を維持するために」働きたいのだ、という、働く行為とその目的というものがそこにはあるように見える。

もっとも、この厚生労働省の資料は、さまざまな回答者の意見を集約したものであるから、個々の回答者がどのように回答したのか、という表現形式はわからない。しかしながら、「なぜ働くのですか・働きたいのですか？」という問いに対する一般的な言語表現として、「お金がいるんですよ」「時間に余裕ができたんです」「健康を維持したくてね」といった表現は特に問題はないように見える。

このように、働く「理由」を尋ねられた場合、人は理由を述べる場合もあれば、目的を述べる場合もある。一般的にわれわれは理由と目的の違いをさほど意識することなく受け答えをしているように見える。

これに対して、革命戦争を戦う革命軍の兵士と政府軍の兵士のそれぞれに対して「なぜ戦うのか」と尋ねた場合、(33)のような回答が予想される。

(33)

- a. 圧政から民衆を解放するため
- b. 理想の国を作るため
- c. 上官から命じられたから
- d. あいつらが発砲してきたから
- e. 国の秩序を守るため

(33)の a.b.は革命軍の兵士の言葉としてふさわしい。これらの言葉はいずれも目的について述べられている。「圧政から民衆を解放するため」「理想の国を作るため」に革命軍の兵士は銃を取り戦うのであろう。いずれにせよ、革命を起こした側の兵士には目的の言葉がふさわしく思える。

一方、b.c.e.は政府軍の兵士の言葉として現れそうである。この中で、c.d.は理由が述べられているようである。「上官から命じられた」という事態が発生し、その事態に対処するために戦っている、「革命軍が発砲してきた」という事態が発生し、その事態に対処するために戦っている、ということがうかがえる。e.は政府軍の兵士の言葉であっても目的を述べているようである。「国の秩序」を守るために戦うのだ、という目的意識がそこには見える。

さて、さまざまな状況において、理由や目的を答えるケースを見てきたが、明らかに目的について答えるケースもあれば、理由を答えることが多くなるケースもあるようである。明らかに目的を答えそうなケースとは、革命戦争を戦う革命軍の兵士の場合などが考えられる。一方、駅へと急ぐ人の場合には理由が述べられそうである。これらのケースの違いとは一体何なのであろうか。

理由と目的とは、行動の起点と到達点に相当する形となっている。この、起点の状況と到

達点の状況の性格がそれぞれ理由を答えるという差を生んでいるのではないであろうか。この、それぞれの状況の性格について検討を行ってみたい。

まず、駅に急ぐ人の場合、起点となっているのは、「寝坊をしたこと」そして、「会社に遅れそうな状況になっていること」である。これに対し、到達点は、「時間どおりに会社に到着すること」である。この「時間通りに会社に到着すること」というのはあまりに日常的なことで、通常はあたりまえのことである。これに対して「寝坊をした」、「会社に遅れそうであること」は、遅刻の常習者でない限り、めったにない、非常事態である。

この、特異なものであるか、そうではなく自然なものなのか、という事柄を、言語学の用語で、有標・無標と呼ぶ。この有標・無標の概念を使うならば、特殊な状況を表すために有標性を持ち、普通で自然な状況を表すために無標性を持つ、と表現することができる。

つまり、駅に急ぐ人の場合には、「時間通りに会社に到着すること」という目的は日常のことであるため、極めて無標性が高い。これに対して「寝坊をした」、「会社に遅れそうであること」は、有標性を持つ事態であると言うことができる。

就業希望者の回答では、「収入を得る必要が生じた」とは理由を述べているようである。この場合の到達点的表現としては、「収入を得る」もしくは、「金銭的に不足のない生活をする」であろう。この場合、「収入を得る必要が生じる」状況は明らかに有標性がある。困った事態になった、ということが明らかになっている。一方、「収入を得る」「金銭的に不足のない生活をする」というのは、望ましい状態ではあるが、困窮した状況に比較すると、それほど有標性を感じるものではない。どちらかというとならば無標である。

「時間に余裕ができた」とは、起点的表現である。到達点的表現は、「時間を有効に使う」であろうか。ここで、時間を有効に使いたい、と思っただけで日々生活を送っている人にとっては、「時間を有効に使う」という到達点的状況は当たり前なことであり、無標性を持つかもしれない。一方、こういう人にとって「時間に余裕ができた」という状況は、有標性を持つものと言えそうである。

一方、「健康を維持したい」とは到達点的表現である。一方、起点として想定されるのは、「健康を気にする」「健康に不安を感じる」といったものであろう。常識的に考えるならば、「健康が維持できていない」という表現こそが起点的なものとなるが、そもそも健康を害している人は、当面働こうという気持ちを持たないであろう。まず健康を取り戻すために休養するのが普通である。

ここで、「健康を気にする」「健康に不安を感じる」状況はどちらかというとならば、普通の状況であり、無標性を感じさせるものである。一方、「健康を維持する」とは、健康を気遣う人にとっては、重要な関心事となっていると言えるであろう。こういった場合には、かなり有標性が高いものであると言えよう。

革命戦争を戦う革命軍の兵士たちの回答においては、「圧政から民衆を解放する」「理想の国を作る」はいずれも到達点的表現である。これらの起点的表現は「圧政が続いているから」「だめな国だから」といったものなどになるであろう。これらの状況は大変な状況であ

り、かなり有標性が高いものと言えるが、それよりも「開放する」「作る」という今よりずっとよい状態を目指す、という表現は人の心を強くとらえる。こちらのほうがより有標性が高いものと言えるであろう。

一方、政府軍の兵士による「上官から命じられたから」「あいつらが発砲してきたから」というものはいずれも起点的表現である。これらの到達点的表現は「上官の命令を忠実に実行する」「あいつらを撃退する」というものになる。これらはかなり受動的な到達点であり、あまり有標性は感じられない。むしろ、「上官から命じられたから」「あいつらが発砲してきたから」という表現に感じられる、迷惑をこうむっている、という感情のほうが、有標性は高そうである。

最後の「国の秩序を守るため」とは到達点的表現である。この状況の起点的表現は「国の秩序が乱されたから」となるであろう。状況としては、秩序が乱される、というのは有標的であると言える。しかしながら、国の秩序を守ることが自らの使命である、と日々考えている将兵にとっては、乱された秩序を元にもどすことこそが、なすべき事柄である、と考えるであろう。こういった状況においては、「国の秩序を守る」ほうがより有標性を持つものと言えるかもしれない。

有	起点的		到達点的	有
○	寝坊をした 会社に遅れそうである	⇔	時間通りに会社に到着する	
○	収入を得る必要が生じた	⇔	収入を得る 金銭的に不足のない生活をする	
○	時間に余裕ができた	⇔	時間を有効に使う	
	健康を気にする 健康に不安を感じる	⇔	健康を維持したい	○
	圧政が続いている だめな国である	⇔	圧政から民衆を解放する 理想の国を作る	○
○	上官から命じられた あいつらが発砲してきた	⇔	上官の命令を忠実に実行する あいつらを撃退する	
	国の秩序が乱された	⇔	国の秩序を守る	○

表3

これらの結果から、われわれは、起点的なものと同到達点的なもの、いずれかの状況のうち、有標性を感じるものの表現を使いやすい傾向があるものと言うことができそうである。そして、これらの状況の中にあって、「寝坊して遅刻しそうであること」、「収入を得る必要があること」、「あいつらが発砲してきた」というような場合には起点的表現が使われやすいことがわかる。

これらの状況は、日常の生活・システムからの逸脱状況であり、速やかに日常の生活・シ

システムを回復すべきである、と認識されるような状況である。多くの場合、日常の生活・システムを脅かされる事態というものは、憂慮すべき事態であり、その回復は重要な事案となってくる。このような場合には、起点的な表現のほうがより有標性が高いため、無標である到達点的な表現が現れにくい可能性がある。

つまり、われわれが日常生活を送っているなかでは、「なぜそれを行っているのか」と問われた場合に、起点的な表現により目を向けがちになる可能性が高いのである。この、起点的な表現が原因や理由であり、われわれが日常の生活を送る中で、無意識のうちにより原因や理由のほうに目をむけがちになり、到達点的な目的の表現を用いにくくなることにつながっているのかもしれないのである。

これらの事柄を考えるならば、システムの機能・目的を記述する際には、到達点的な表現を意識するとともに、われわれが無意識に持つ状況の有標・無標性にも思いを巡らす必要があるそうである。われわれは、機能・目的を記述しようとする際に、状況の有標性に引きずられて、無意識のうちに起点的な表現に目を向けがちになるのかもしれない。ことに初学者の場合には、この傾向が高い可能性がある。

3.機能表現と日本語の特性

冒頭に記述した「京急って、ドアを閉めますって言うんだよね」とは、テレビ朝日のタモリ倶楽部における森田一義の言葉である。これは、京浜急行の案内が他社とは異なっているということを表している。

多くの鉄道会社において、ドアを閉める際の案内は、「ドアが閉まります」と言うものである。東京メトロでは、録音された車内アナウンスにおいて、「発射合図のベルが鳴り終わりますと、ドアが閉まります」と案内している。これに対して、同じ東京メトロの駅係員・車掌が行うリアルタイムの案内では、「このへんでドアを閉めさせていただきます」と言うものも聞くことができる。

この、「ドアが閉まります」というのと「ドアを閉めさせていただきます」という表現は東京メトロ以外の、多くの鉄道会社でもしばしば耳にすることができる。しかし「ドアを閉めます」という表現はあまり聞くことができない。これが冒頭の森田一義の言葉の背景となっている。

この章では、これらの表現を切り口として、日本語の表現の特性を考え、それらの特性が機能表現とどのような関わりがあるのか、という事柄を検討していきたい。

3.1 鉄道案内の文法的解釈

まず、京急で行われている「ドアを閉めます」という表現では、「閉める」という動詞を使用している。これは他動詞である。目的語はヲ格で表されているドアである。閉める動作を行う動作の主格は明示されていないが、この場合は、話者である、駅員・車掌である。つまり、話者である駅員・車掌が、「ドアを」これから「閉める」つもりである、ということ表現している。この表現には、文法的に特におかしなところはない。しかし、この表現が使用されている場面に遭遇することは少ないようである。

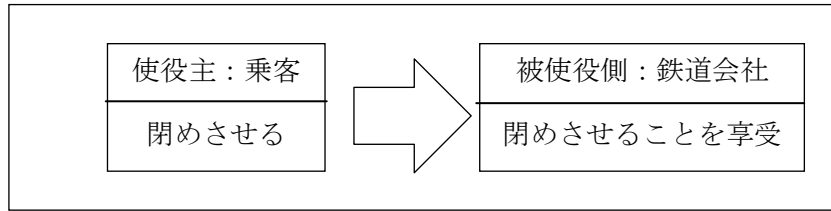
一方、「ドアが閉まります」という表現では、「閉まる」という動詞を使用している。これは、非意志的内容を表す自動詞である。何かが無理な働きや事情によって閉まる、と言う事柄を表している。この場合、主格となる何かは、ドアである。ドアという非意志的存在が、自然に閉まるであろう、という事柄を記述していることになる。この表現にも文法的に特におかしなところはない。

しかしながら、その意味合いを考えると、少し奇妙な表現であることに気が付く。ドアがどうして閉まるのかという点について考えるならば、その操作を行っているのは、車掌である、鉄道会社の人員である。従って、動作主は車掌などの鉄道会社であるわけで、その動作を自ら行っているにもかかわらず、あたかもドアが自然現象で閉まるかのように表現をしているのである。しかし、この表現はよく耳にするものである。

最後に「ドアを閉めさせていただきます」という表現であるが、これはヲ格の目的語がドアであり、「閉める」という他動詞を使用している。しかし、この場合、使役形の「閉めさせる(閉めさす)」を用い、接続助詞の「て」を付加し、「もらう」の謙譲形である「いただく」を接続する形式となっている。

まず、使役形となっている「閉めさせる」使役主は、聞き手であり、この場合、乗客になる。つまり、「乗客」が「閉めさせている」という意味になる。そして、その「閉めさせる」という使役を享受する主体は、車掌・駅員である。これを図示すると下図のようになる。

図8



このように、「ドアを閉めさせていただきます」という表現では、乗客・利用者側が、いつのまにか使役主になってしまう構造となっている。乗客・利用者側が意図していないにも関わらず、使役主とされる構造なのである。

この「(さ)せていただく」という形式の文に違和感を覚える、ないしは、ふさわしくない場面でも使用される誤用として指摘する意見も多い。この形式は、もともと関東では使用されていなかったため、この形式に違和感を覚える人も高齢者を中心にまだいるようである。

この「(さ)せていただく」形式は、井上史雄によると、もともと関西で使用されていた形式であり、1950年代ごろから徐々に関東でも用いられ始めたようである。そのため、関西では、この形式に違和感を覚える人はほとんどいないようである。

ここで、「(さ)せて」と(さ)で記述したのは、「させて」という使役の活用を行うのは、下一段・下二段活用動詞のみであるからである。五段活用動詞の場合は、「読ませる(読ます)」や「立たせる(立たす)」というように、「さ」は入れずに活用を行う。ところが、近年、「させていただく」形式が多用されるにつれて、五段活用動詞でも「読ませさせていただきます」のように使役形に「さ」を加えて使用する誤用が見られるようになった。

さて、この「(さ)せていただく」の原型は、おそらく「(さ)せてもらう」であろう。

(34)

「疲れとるやろう、休んでいけや」(人に向かつての勧め)

「ほな、休ませてもらおうか」(勧めの受け入れ)

この「もらう」を謙譲形の動詞としたものが「いただく」である。伝統的に関西ではへりくだった遠回しな表現を好む傾向があるようであり、この「(さ)せていただく」形式が早くから他の地域に比較して、よく使われているものと考えることができる。

3.2 使役形式の意味合い

さて、3.1 で見たように、「ドアを閉めさせていただきます」という文には使役の形式が使用されている。同様に、使役の形式は、冒頭にも述べた、ふたつの機能表現である(1)の b.にも使用されている。

(1)

- a. 学生が勉強する
- b. 学生に勉強させる

(1)の a.b.というふたつの機能表現の形式上の違いは、ひとつは使役の形式をとるか否かと言う点がある。もうひとつの形式上の違いは、a.においては、学生「が」と学生がガ格を取っているのに対して、b.では、学生「に」と学生が二格となっている。

ガ格で表されている a.では、学生は主格となり、勉強をする動作主であることを表している。一方、b.ではこの文では主格は表されていない。言外にある主格としては、この場合、「システムが」ないし「システムの設計者が」あるいは「システムの利用者が」ということになる。そして、主格の「システム（およびその設計者もしくは利用者）」が使役主となり、動作主である学生に、勉強をさせる、という構造となっている。

ここで、(1)b.では、動作主である「学生」を二格で表しているが、使用される動詞が自動詞である場合は、ヲ格も用いることができる。

(35)

- a. 学生に勉強させる
- b. 学生を勉強させる

仮に動詞が他動詞である場合には、動作主をヲ格で表すことはできない。なぜならば、他動詞は、動作の及ぶ対象であるヲ格を別に必要とするからである。これは、ひとつの文節の中にはヲ格はひとつしか用いることが出来ない、という日本語の文法の制限による。

(36)

- a. 学生に勉強をさせる
- b. ?学生を勉強をさせる
- c. 学生に論文を書かせる
- d. ?学生を論文を書かせる

上記(36)で見ると、「勉強をさせる」「論文を書かせる」と、ヲ格を必要とする他動詞を用いた場合、動作主をヲ格で表すことができず、二格になる必要がある。

一方、自動詞を用いた場合、動作主をヲ格と二格のふたつで表すことができるが、このふたつには微妙な意味合いの違いが出てくる。

(37)

- a. 息子を留学させる

b. 息子に留学させる

上記、(37)a.b.のふたつはいずれも息子が留学する、ということを表しているが、a.のヲ格を用いたほうは、息子の意向がどうか、ということは特に考慮には入っていない。息子の意向に関わらず、強制的に留学させる、というニュアンスが感じられる。

一方、b.の二格を用いたほうは、息子の意向がどうなのか、ということに関わらず、強制的に留学させる可能性もあるが、息子が「留学したい」と言ったので、留学することを許した、という意味合いを表す可能性が出てくる。

このように、自動詞では、動作主をヲ格にするか二格にするかによって微妙なニュアンスの違いというものを書き記述し分けることも可能であるが、動作主をヲ格で記述できない他動詞の場合、強制的な使役の意味合いと許可や放任といった意味合いが混在することになる。従って、このような場合は、前後の文脈から、その意味合いを読み取る必要がある。

このように、使役の形式には、強制的に動作主に動作をさせる、という意味合いとともに、許可や放任の意味合いも持ってくる。先に言及した鉄道会社の案内で使われる「ドアを閉めさせていただきます」という形式も、利用者が強制的に閉めさせる。という意味合いではなく、利用者が閉めることを許可したことを、ありがたく受ける、という意味となっている。

一方、機能表現の「学生に勉強をさせる」の場合は、前後の文脈が存在しないため、その意味合いが強制的に学生に勉強という動作をさせる意味であるのか、それとも学生が自発的に勉強するという行為を許可、もしくは放任しているのか、ということは判断することはできない。それにも関わらず、強制的に勉強をさせているようなニュアンスが強く感じられる。

しかしながら、次の文では、強制的に動作を行わせている、という意味合いはあまり感じられない。むしろ、許可・放任の意味合いが強く感じられる。

(38)

a. 子どもを公園で遊ばせる

この違いはいったいどうして起こるのであろうか。一般的に子供は公園で遊びたがっている存在として広く認識されている。そのため、公園へ連れて行って、ここで遊んでいいよ、と告げることで子供が自由に遊ぶことを許可したのであろう、という推測が容易に成り立つ。

これに対して、学生のほうは、あまり自発的に勉強をしないものだ、と認識されることが多いため、勉強をしたがらない学生を、その意思の有無に関わらず強制的に勉強をさせる、という推測が自然に成り立つものと思われる。

3.3 日本語の形式的特徴

先に、鉄道会社では、「ドアが閉まります」という非意志的自動詞を用いた表現はよく耳にするものの、「ドアを閉めます」という意志的他動詞を用いた表現はあまり耳にしなかった。この

「ドアが閉まります」という表現の中には明確な意思は見受けられない。また、ドアを閉める動作主についても明示されていない。むしろ自然に閉まるのだという意味合いが感じられる表現となっている。

実際は、鉄道会社の担当者である車掌や駅員が「閉めて」いるわけで、本来は、「(私が)ドアを閉めます」と表現するのが論理的に正しい。ここで(私が)と記述したのは日本語では、特に口語文において、一人称・二人称を表さないことが多いためである。

このように、自ら決定し、自ら行うことに関しても、そのことを明確に述べない表現は日本語において、多々見られる。

(39)

- a. このたび、結婚することになりました
- b. このたび、退職することになりました

これら(39)a.b.いずれの文も、「結婚する」のも、「退職する」のも発言主である。従って、これらの文は、正確には「私(私たち)は結婚します」「私は退職します」と記述することもできるし、これらの記述をおこなう事で、誰が何をするのか、という事実関係は明確に表現されている。それにも関わらず、一般的にはこういった誰が何をするのか、ということを明確にする表現は用いられず、(39)a.b.にあるような表現が多用される。

この、(39)a.b.の表現は、自らの意志や動作を表現するのではなく、自然にそうなる、という形式をとる。結婚したり、退職するのは自らそうすると決定したか否かという事実関係とはかかわりなく、何らかの働きかけによってそうなる、残念ながらそうなってしまった、あるいは一歩踏み込んで、本人の意向は無視され、周囲の環境・あるいは運命や超自然的力がそうさせてしまったのだ、という意味すら包含する。

こういった表現は日本語において広く使われているが、これらは英語とは異なった特色となっている。これらの表現から、国広哲也は、英語は人間中心、日本語は状況中心という傾向があることを指摘している。

(40)

- a. We'll have some beef.
- a'. 今日は牛肉が出ますよ。'
- b. We've come to a conclusion.
- b'. やっと結論が出た。
- c. I've lost a button
- c'. ボタンが取れちゃった。

上記は国広哲也が研究材料とした例文の一部である。(アンリ・フレ日本語二千字・Bennett. T. J.

A. TwoThousand Sentence of British Eenglish)aとa'、bとb'、cとc'はそれぞれ同じ事象を英語と日本語とでどう表現するか、ということを表している。

これらの表現の違いから、英語においては、We や I という人間が主語になる傾向が高く、人間がどうするのか(したのか)、という文構造を取るのに対して、日本語では、人間が主語となっておらず、それぞれの状況を説明する傾向が高いことがわかる。

しかし、日本語では、人間が主語にならないか、というと、そうではない場面というものもたくさんある。英語では、無生物が主語になる場合も多々あるが、日本語では一般的には無生物は主語とならず、そういった場合には人間が主語となる。

(41)

a. The heat makes me feel languid.

a' . #熱気が私をだるく感じさせる。

a' ' . 暑いので体がだるい。

b. Despairdrove him to commit suicide.

b' . 絶望が彼を自殺へ追いやった。

b' ' . 希望を失って彼は命を絶った。

c. What brought you here?

c' . #何があなたをここに連れて来たのですか。

c' ' . あなたはなぜここに来たのですか？

d. The bus will take you to the station.

d' . #このバスはあなたを駅に連れて行きます。

d' ' . このバスに乗ると、駅に行けますよ。

e. His words surprised me.

e' . 彼の言葉は私を驚かした。

e' ' . 彼の言葉に驚いた。

f. Rain prevented us from going on a picnic.

f' . #雨がピクニックに行かせなかった。

f' ' . 雨でピクニックに行けなかった。

上記は、くろしお言語大学塾における西光義弘の挙げた例文の一部である。これらの例文はいずれも英語においては、無生物が主語となっている。そしてひとつめの日本文はその直訳表現であるが、#がついた文は文法的に間違っているわけではないものの、通常は使われることのない表現である。また、他の直訳表現もb'e'それぞれ、使われないことはないものの、かなり特殊なケースでしか使われないものである。

そして、それぞれの例文の日本文は、自然な日本語の文章であるが、主語が明示されていない文も含め、いずれも人間が主語となる。当然、英語においても同じ事象を記述するのに、人間を主

語とする文も使われるのであるが、英語の特徴として、無生物を主語とすることが可能であり、しばしば使われているということである。一方、日本語でも無生物が主語としてまったく使われないわけではないが、あまりその頻度は高くないし、特殊な状況を除いては使われることがない、と言えるのである。

(40)(41)の例文の比較は、矛盾した事柄を指摘しているように見える。しかし、西岡は単に主語だけに着目してしまうと、これらの矛盾をうまく説明することができないものの、文の構造自体に着目すると説明が可能であると指摘する。それは、英語においては、動作主が何らかの動作を行う、「する」ことを記述することが多いのに対し、日本語は、ある状況に「なる」ことを記述することが多い、というものである。

結果として、英語では、動作主が人間のときは、人間が主語となり、無生物が動作主と想定される場合には、無生物が主語となりうるのである。一方、日本語では、状況がある状態になる、ある、という記述の仕方を好むため、同じ事象を記述する際には、動作ではなく、状況の変化、といった記述のしかたを多くするのである。

英語では(41)で見たように、Rain prevented us from going on a picnic といった無生物が何かを行う、という形式の記述を行うことも普通にあるが、日本語では、通常、雨でピクニックに行けなかった、と記述するのである。

図9

英語に多い形式	XがYをZする
日本語に多い形式	Xによって、YがZ'する(になる)

この、英語は「する」形式をとりがちであるのに対し、日本語が多くの場合に「なる」形式をとることは池上が指摘して以来、さまざまな研究者によって研究がおこなわれている。上記ふたつの形式において、Z は他動詞が用いられ、Z' は自動詞や状態を表す述語が用いられる。冒頭に述べた「ドアを閉めます」という表現があまり聞くことができず「ドアが閉まります」という表現がよく用いられること理由がこれによって説明することができる。車掌(X)がドア(Y)を閉める(Z)という形式は日本語の表現ではあまり好まれず、ドア(Y)が閉まる(Z')という表現が好まれることになる。

3.4 動作主の表示について

さて、「ドアを閉めます」という文では、ドアを閉める主体である動作主は明示されていないものの、動作主は発話者であることが聞き手には了解される。単に一人称の主語が省略されているだけであることは明らかである。

一方、「ドアが閉まります」という文は、非意志的な自動詞が使われているため、動作主は存在しない。しかも、いかなる背景、理由、仕組みによってドアが閉まるのか、ということも聞き手には明確にはわからない。ここで想定される背景、理由、仕組みとして、「時間になったから」「ドアを閉めるボタンを押すから」「自動ドア開閉システムが作動するから」などが考えられる。

図 10

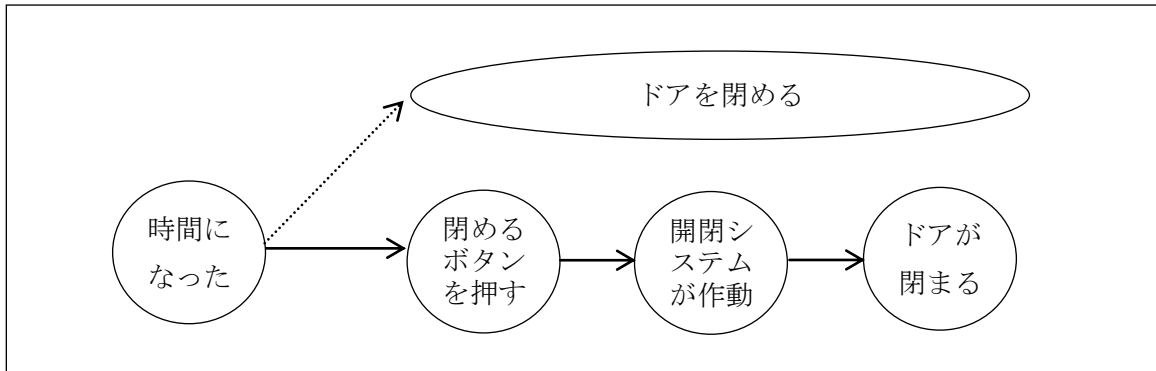


図10で表したように、「ドアを閉める」表現のほうでは、「時間になったから」というような背景は想定されるかもしれないが、あまりその背景は色濃く感じ取ることはできない。時間になったかどうかに関わらず、私がドアを閉めるのだ、という意志と動作のほうにハイライトが当たる。

一方、「ドアが閉まる」と表現される方の流れにおいては、何らかの背景や理由があって、「閉まる」のであろうか、と聞き手に想像を促す。当然、鉄道の運行においては、時間になったから、電車を発車しなければならない、だからドアが閉まるのであろう、という連想が容易に働く。

また、「ドアが閉まる」表現の流れにおいても、意志的な動作が存在する。それは「ドアを閉めるボタンを押す」という部分である。「ボタンを押す」のは意志的動作であり、動作主が存在する。しかし、「ドアが閉まる」と表現した場合は、「ボタンを押す」動作をするのが発話者自身なのか、他の人物なのか、ということは明らかではない。

このように、動作主が誰なのかよくわからない表現は、(39)に挙げた「このたび、結婚することになりました」「このたび、退職することになりました」など、日本社会の中では、さまざまな場面で聞くことができる。

このように、動作主がある行為についても動作主を明らかにしないことは、先に挙げた無生物主語の動作を表現しないことと併せて、日本語の表現では好まれる傾向があるようである。観点を少し変えると、日本社会で日常的に使用される敬語表現にもその傾向が見られる。

(42)

- a. 先生は音楽を聞かれますか。
- a'. 先生は音楽をお聞きになりますか。
- b. 先生が話される。
- b'. 先生がお話になる。

上記は、敬語表現の中の尊敬語のふたつの表現を並べたものである。a.b.の表現は、動詞の可能形・受身形と同じ形を使って、尊敬表現としている。動作はいずれも先生であるが、尊敬の念を込めると、可能表現、もしくは受身表現と同じ形になり、単純に動作を表す表現には見えなくなって

いる。

また、a' . b' . の表現は、「お+動詞+になる」という表現形態をとる。通常、こちらの表現のほうが、a.b.の表現より尊敬の念が高い表現と認識されている。この表現では、先生が「する」ことを、「なる」こととして表現している。つまり、動作主が主体的に行うことであっても、自然現象のように表現するのである。

一方、謙譲語では、このような形にはならない。

(43)

- a. 私がお話をお聞きします。
- b. 私がお話します。

これら謙譲表現では、「お+動詞+する」という表現形式となり、動作主が発話者であることが明示される。このように、尊敬表現では、可能形・受身形の使用と、「なる」表現を用いて、動作主をあいまいに表現したい心理が働くが、へりくだる際にはそのような配慮は必要とされていないことがわかる。

この尊敬表現は、日本の社会にあっては、単に上下関係を示す場合に用いられるだけではなく、ウチ・ソトの関係や親疎関係を示す場合にも用いられる。こうった、ウチ・ソトの関係や親疎関係を示す場合とは、話者と聞き手との間に距離を置きたい場合であり、尊敬表現には、こういった働きがある。

このように、日本社会では、動作主を明示しない表現が好まれる傾向があり、それは尊敬語などの表現にも表れているのである。これは、動作主の持つ意志性・主体性というものを隠したいという心理が働いている現れと考えることもできる。日本語の表現では、あまり意志的・主体的に行動することを明確にすることが好まれず、自然に「そうなる」という形式が好まれるとも言えるのである。

3.5 機能表現の形式について

このように、日本語の表現では、動作主を明確にしない表現が自然であり、英語に多い形式:「XがYをZする」ではなく、「Xによって、YがZ'する(になる)」が好んで用いられる傾向があることがわかった。この観点から、冒頭に挙げた、下記ふたつの表現の違いについて考えてみる。

(1)

- a. 学生が勉強する
- b. 学生に勉強させる

ここで、a.は、一見すると、「XがYをZする」という表現であるように見える。しかしながら、これはシステムの機能表現であり、なんらかの形でシステムとの関係性を見ていく必要がある。このふたつの表現にシステムの存在を明示すると、下記のような表現となる。

(44)

- a. システムによって(を利用して) 学生が勉強をする
- b. システムが学生に勉強をさせる

(44)のように、システムを含めて表現してみると、a.が「Xによって、YがZ'する(になる)」表現形式であるのに対して、b.が「XがYをZする」表現形式となっていることがわかる。つまり、(1)a.「学生が勉強する」表現は、日本語として自然な表現である何らかの働きによって、ある状態に「なる」という表現であるのに対し、(1)b.「学生に勉強させる」表現の方は、日本語ではあまり用いられない、無生物が主格となる表現なのである。

また、(1)b.「学生に勉強させる」表現は、言外に存在する、システムという無生物が使役主となり、人である、学生を使役している形である点でも日本語の表現としては特異である。このように、無生物が使役主となり、人を使役する表現は、英語にはよく見られるものであるが、これを日本語として使った場合、(41)の a'. 「熱気が私をだるく感じさせる」や f'. 「雨がピクニックに行かせなかった」といった表現と同様の違和感を持たれる可能性もある。

このように(1) b.「学生に勉強をさせる」という表現は、日本語ではあまり用いられない特異な表現形式であることがわかる。そのために、むしろ(1) a. 「学生が勉強する」という人間が主語となる表現のほうがより好まれる可能性もある。

また、意味的な側面から考えるならば、(1) b.「学生に勉強をさせる」という表現には、使役の表現が内包する、許可や放任、といった意味合いはあまり感じられない。むしろ、学生の意志がどうであれ、有無を言わず「勉強させる」という強制の意味合いが強く感じられてしまう。

むしろ、システムの機能の表現としては、この表現は、必ずしも被使役主である学生の意志を無視し、強制的に「勉強させる」という意味を表すものとして用いられているわけではない。被使役主である学生自身が、システムの関与についてまったく無自覚なまま、自主的に勉強したくなって、勉強することも、「勉強させる」という表現の中に含まれる。

つまり学生の自主性を無視することはこの表現には特に内包されていない。しかしながら、通常、日本語で用いられる使役の意味合いから、強制的な関与がイメージされる傾向は否めない。特に、学生の視点から、「学生に勉強をさせる」という文を書き換えるならば、使役受身の「学生が勉強させられる」という表現となる。これは、通常、学生が迷惑をこうむっている、という意味内容を表してしまう。

これに対し、(1) a. 「学生が勉強する」という表現には、さまざまな意味解釈が可能である。文章そのものだけから判断する意味としては、学生が勉強するのだ、という意味だけしか持たないが、そこには学生が自主的に勉強するのだ、という解釈も入る余地がある。つまり、勉強という行為への動作主:学生の自主的関与という意味も内包しうるのである。

また、システムの機能表現としてこの表現を考えるならば、先に述べたように、システムがアクティブに関与することによって、「学生が勉強する」状態になる、という意味解釈が成り立つ。また、シス

テムの関与の仕方が、アクティブなものではなく、パッシブなものである場合も想定できる。つまり、自主的に学生が勉強するときに、学生側がシステムを利用する、という意味にとることも可能である。このように、(1) a. 「学生が勉強する」という表現はさまざまな解釈が成り立つ。このために、この表現をシステムの機能表現として用いる場合には、意味内容が明確になるように、言葉を付加する必要があるであろう。

以上のことから、これらのふたつの表現は近接した表現であるにも関わらず、それらの表現についての好みが分かれる理由がいくらか見えてきた。(1) b. 「学生に勉強をさせる」表現に関しては、日本語では通常用いられない無生物主語が使役主となる表現であり、かつ、学生に勉強を強いる、つまり学生が迷惑をこうむる、という意味内容を連想するために、違和感を持つ人はかなりいることが考えられる。

今後、(1) b. 「学生に勉強をさせる」表現形式を初学者に学習させる場合、自然言語としてわれわれが日常使用している日本語と、ここで用いる言語表現とは異なっていることを明確にする必要があるかもしれない。その際には、無生物主語が使役主となる特異な表現も用いる場合があること、使役形が使われていてもその意味する内容は多様であることなどの、言語の外形的・意味的用法に関する説明も必要となるであろう。

あるいは、(1) a. 「学生が勉強する」表現のように、極力、われわれが日常使用する日本語で機能・目的を表現していく方向性もあるであろう。その際には、意味内容をより明確にしていく努力も必要であろう。また、意味内容を明確にするためには、設計対象のシステムがどのようにふるまい、動作の主体と関係性を持つものであるのか、という視点を明確にしていく必要があるであろう。

さて、ここで取り上げたふたつの表現形式の問題は、たびたび議論になる、システムの究極の目的をいかに記述するのか、という話と符合する。それは、「人々を幸せにする」という表現と「人々が幸せになる」という表現である。このふたつの表現のうち、「人々を幸せにする」という表現は、英語でよく使われる、「X が Y を Z する」表現であり、一方の「人々が幸せになる」表現のほうは、「X によって、Y が Z' する(になる)」表現形式、特に日本語で好まれる「なる」表現である。(いずれもXはシステム、ないしシステム的设计者・利用者である)

これらの表現のうち、いずれを選択するか、ということに関しては、システムの存在、その設計者が世界とどうかかわろうとしているのか、という問題にまでつながっているのかもしれない。西洋的な考え方からすれば、システム的设计者はシステムを使うことによって、世界をよりよいものへと主体的に変化させていくべきであると考えられるであろう。その場合には、「する」表現を選択する可能性がある。

一方、システムの働きは世界の変化の一部を支援するにすぎず、より大きな流れの中で、世界は変化していくものである、と考える場合には「なる」表現を選択するかもしれない。こういった大局的な観点からの世界の捉え方は、東洋的であり、日本的なものであるのかもしれない。

このように、機能の表現の形式には言語的な特性という問題が潜んでいる可能性がある。また、その言語的な特性の背後には、その言語を用いている文化的な土壌、ものの考え方というものも影響している可能性もあるだろう。機能の表現を研究するうえでは、このような視点も必要にな

るのかもしれないのである。

おわりに

今回は、システムの機能表現の形式について、機能のレベルには関わりなく、ひとつの表現が機能表現として成立する際の問題について、言語学的な視点から考察を行ってみた。

ここでわかったことは、機能表現として成り立つ述語にはある程度制限があること、目的を記述せよと言われても理由やより下位の機能を記述してしまうケースには、動詞の選択が関係する可能性があること、原因や理由と目的のいずれが表現されやすいかということには、状況の有標性が関係している可能性があること、そして、日本語が「なる」ことを表す特徴があり、それが機能の記述を行う際の好みに影響を与えている可能性があることである。

ここで行った考察は非常に基本的な事柄であり、日本語の母語話者にとっては、至極あたりまえの事柄である。しかし、システムの機能を記述する際に起こりうる問題のいくつかは、こういった言語的な問題と関係がある可能性がある。しかし、あまりにあたりまえの事柄ゆえに、そういった問題の原因がこれまで見過ごされてきた可能性もある。

ワークデザインにおけるシステムの機能は、文章で表現される。そして、その文章とは自然言語によって、記述されているものである。そのために、機能表現に関するさまざまな問題を考えていく上では、今後とも、言語学的なアプローチによる検討が必要であると考え。ここでの考察が、その一助となれば幸いである。

参考文献

- (1)「する」と「なる」の言語学 池上嘉彦 大修館書店 1981
- (2)新しい日本語学入門 庵功雄 スリーエーネットワーク 2001
- (3)日本語文法ハンドブック 松尾弘他 スリーエーネットワーク 2000
- (4)新選国語辞典 金田一京介他 小学館 1959
- (5)くろしお言語大学塾 西光義弘

<http://www.gengoj.com/>

- (6)Wikipedia 他動詞・自動詞 動詞の区分 日本語の乱れ

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%96%E5%8B%95%E8%A9%9E>

- (7)平成 17 年版 働く女性の実情 厚生労働省

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/03/dl/h0329-1a1.pdf#search='%E5%B9%B3%E6%88%9017%E5%B9%B4%E7%89%88+%E5%83%8D%E3%81%8F%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%81AE%E5%AE%9F%E6%83%85+%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81>